

堂垣外遺跡

—弥生時代、奈良・平安時代を中心とした—

埋蔵文化財発掘調査報告書

1983・9

長野県下伊那郡上郷町

「堂垣外遺跡」正誤表

頁	行	誤	正
2	17	対しましてと	対しましても
3	21	一賢表	一監表
5	5	堺界	境 界
8	2	雲形寺古墳	雲彩寺古墳
	4	鳥居藏博士	鳥居龍蔵博士
		上伊那	下伊那
	17	たれた	された
	29	結成たれ	結成され
	38	一丁田	びくに畠
10	11	相原A	柏原A
	33	位置づけ	位置づけ
11	20	遺跡郡	遺跡群
	24	字沼邑	字沼邑
	25	字沼邑	字沼邑
16	35	図2 常垣外	図2 堂垣外
17	7	特徴的	特徵的
18	6	かかりるが	かかるが
20	33	土壤郡	土壤群
21	7	末製品	未製品
	12	土坑	土 壤
26	19	末期	後 期
	21	を上層	は上層
28	25	位づく	位置づく
29	3	遺跡郡	遺跡群
	4	遺跡郡	遺跡群
30	2	県教育委員会	上郷町教育委員会
	3	よって	おいて
	22	便宜	便 宜

堂 垣 外 遺 跡

—弥生中期、奈良・平安時代を中心とした—

埋蔵文化財発掘調査報告書

1983・9

長野県下伊那郡上郷町

序

昭和57年度において土地改良事業、堂垣外、西岡地区農道新設工事が施工されることにともない、当設工区は飯沼区の北条から丹保へ通ずる農道で延長239メートル、幅4.5メートルの工事計画の実施に先立ち埋蔵文化財発掘調査を行いました。

同地域はかねてから北条遺跡や丹保遺跡があり、更に詳細分布調査によっても新たに堂垣外遺跡も確認された場所でもある為、分布調査を担当された飯田工業高校教諭、岡田正彦氏や県教委文化課の指導を得て発掘調査を計画し調査委員会委員長下井稲穂氏と、調査団を組織して堂垣外遺跡の記録保存をはかることにしたところであります。

今回の調査に際し調査団に佐藤赳信氏（団長「日本考古学協会員」）と前記岡田正彦氏（日本考古学協会員）をお願いし、2月5日から約15日間寒風吹きさらす中、地元作業員の方々等の御協力により発掘作業が進められました。その結果本書にも著わされているように弥生時代中期、奈良時代、平安時代の住居址をはじめ、多くのその期の遺物が出土し、好資料と成果が得られ古代文化の遺産を今後にとどめることができました。

ここに報告書がまとめられるに当たり本調査に御盡力くださった調査団の佐藤、岡田両先生をはじめ発掘作業に御協力いただいた地元等、多くの作業員の方々の御苦労に厚く感謝申し上げます。

又、町当局それに、調査委員会等関係各位の御理解と御援助に対しましてと、深く謝意を表わす次第であります。

上郷町教育委員会教育長

関 島 昌 平

例　　言

1. 本書は、昭和57年度土地改良事業、堂垣外・西岡地区農道新設工事に伴う堂垣外遺跡の発掘調査報告書である。
2. 本書は堂垣外遺跡道路敷の南端の1部調査であり、遺跡の1端を示す、資料提供と問題提示の報告書となっている。
3. 本書の執筆は環境を岡田、他は佐藤が分担し、編集は佐藤が担当した。
4. 写真は佐藤が、造構実測図は佐藤・牧内が、遺物の作図は佐藤、造構・遺物の製図は田口・佐藤が分担した。
5. 造構実測図のうちピット内、または横に記してある数字は床面からの深さをcmで、遺物出土状況は床面からの高さをcmで（床面出土は数字を略してもいる）あらわし、縮尺は図示してある。
6. 遺物は上郷町歴史民俗資料館に保管してある。

目　　次

序	2
例　　言	3
目　　次	3
博 図 目 次	4
I 環　　境	5
1. 自然的環境	5
2. 上郷町の考古学調査	8
3. 歴史的環境	10
4. 上郷町遺跡一覧表（表1）	12
II 発掘調査経過	14
III 発掘調査結果	15
1. 弥生時代	16
2. 奈良平安時代	22
IV 考　　察	27
まとめ	30
遺　　物　　図	31
図　　版	41
遺跡　　造構　　遺物　　発掘スナップ	
調　　査　　組　　織	

挿 図 目 次

図1の1	堂垣外遺跡地形・位置図及び周辺主要遺跡図 (1:30,000)	6
図1の2	堂垣外遺跡地形詳図 (1:2,500)	7
図1の3	上郷町遺跡分布図 (下段)	9
図2	堂垣外地区新設町道新設計画図	16
図3	堂垣外I・II調査区土層断面図	17
図4	堂垣外遺跡発掘調査構造分布図	17
図5	堂垣外遺跡1号・2号住居址、流失遺構北・南	18
図6	" 流失遺構土層断面図	19
図7	" 溝址I号	20
図8	" 土坑3・4・5号	21
図9	" 5号住居址、土壤6・7号	22
図10	" 3・4号住居址	23
図11	" 6号住居址、土壤群	24
図12	堂垣外1号住居址出土遺物 (1:3)	31
図13	" " (1:3)	32
図14	" 2号住居址出土遺物 (1:3)	33
図15	" 溝址1号、土壤出土弥生時代遺物 (1:3)	33
図16	" 流失遺構出土遺物 (1:3)	34
図17	" 溝址1号、2号住居址、土壤群等出土弥生時代遺物 (1:4)	35
図18	" 5号住居址出土遺物 (1:4)	36
図19	" 3号・4号住居址出土遺物 (1:4)	37
図20	" 6号住居址出土遺物 (1:4)	37
図21	" 土壤12号出土遺物 (1:4)	38
図22	" 土壤8・9・14・21・20・23号出土遺物 (1:4)	38
図23	" 土壤8・9・14・21・20・23号出土遺物 (1:4)	39
図24	" 土壤群上層出土遺物 (1:4)	40

I 環 境

1. 自然的環境

堂垣外遺跡は長野県下伊那郡上郷町飯沼丹保の小字堂垣外・西岡・金ノ面・マネゾイ・溝口・家ノ軒・秋成・星場一帯に所在する縄文時代から近世に至る大遺跡である。遺跡の中心は国道153号線の南東側飯田市座光寺との境界をなす土曾川の右岸、海拔420～430mの堂垣外地籍の自然堤防上にみられる。地目は水田を中心に畑及び宅地である。

遺跡のある上郷町は、長野県の南端を南北に走向する木曾山脈と赤石山脈の西側を並走する伊那山脈との間にひろがる袋状の伊那盆地内にあり、その中央部を天龍川が南流している。伊那盆地はかつて伊那谷とも言われ、長さ72km、幅8～12kmに達し、その南半の飯田・下伊那地方を特に飯田盆地と呼称している。上郷町はこの飯田盆地の西北部に位置し、天龍川とその支流によって形成された河岸段丘上に、人々の生息跡が認められる。

上郷町の段丘は『下伊那地質図』によれば、洪積土壌の分布する中位段丘・低位段丘Ⅰ及び沖積土壌のひろがる低位段丘Ⅱに区分され、前二者は黒田地籍の俗に言う上段である。後者は飯沼・別府地区等の下段にあたる。低位段丘Ⅱは、さらに南条面・別府面・飯沼面と細分される。南条面は現在の天龍川の河床に統く最低位の沖積段丘で、海拔398～408mの間にあり、現河床との比高は2～3mである。別府面は南条面の一級上に位置する段丘で、標高408～418mに位置し、その比高差は約2mある。堂垣外遺跡の立地する飯沼面は、さらに上段で海拔418～440mにあり、別府面との差は2～3m、天龍川との比高差は20～40mを測る。この段丘の堆積物は疊が多く、一部に砂や粘土層もみられ、かつては屋根瓦用の粘土をこの地で採掘したこともある。これら低位段丘Ⅱ地帶は、湧水が豊富であり、上郷町でも典型的な水田地帯となっている。この付近は地下水位が高く、井戸戸水を飲料水として利用する家庭が多いが、浅いために水質の悪さが問題化してきている。特に飯沼地区は、字名で示唆されるごとく、沼沢的な性格をもつ凹地があちこちにみられ、同一段丘上でも微地形の発達が顕著なため、宅地や畑と水田地帯が入り組んで展開している。

上郷町の気象の年平均値（昭和25年～50年の平均）を知るため、飯田測候所調査による資料を参考にしてみると、年平均気温は12.3°C、最暖月の8月の平均気温は24.3°C、最寒月の1月の平均気温は0.6°Cである。下段の飯沼地域と飯田測候所との標高差約60mを勘案すれば、これよりやや気温が高いことが推察され、暖かく住みやすい地域であることがわかる。ちなみに、桜の開花日は4月10日前後で春の訪れる早い地域である。また、年降水量は1,681mm、昭和55年は1,747mmであるので、大体1,700mm前後の年降水量と考えられ、農業に適地の場所と言えよう。但し、風向きは西寄りの風が比較的強く、古くからの家は玄関を南側に向いているのが一般的である。

植物の分布状況、すなわち植生については自然環境の破壊等により、当時を再現することは困難であるが、土壤の堆積層位等からみて、現在と著しい差異はないものと推定している。



図1の1 堂垣外遺跡地形・位置及び周辺主要遺跡図 (1 : 30,000)

1. 堂垣外遺跡
2. 豊彩寺古墳
3. 正泉寺遺跡
4. 鮎川遺跡群
5. 鹿光寺原遺跡
6. 中島遺跡
7. 高岡1号古墳
8. 北原遺跡
9. 林里遺跡
10. 阿島遺跡
11. 爛牛原遺跡群
12. 伊久圓原遺跡群

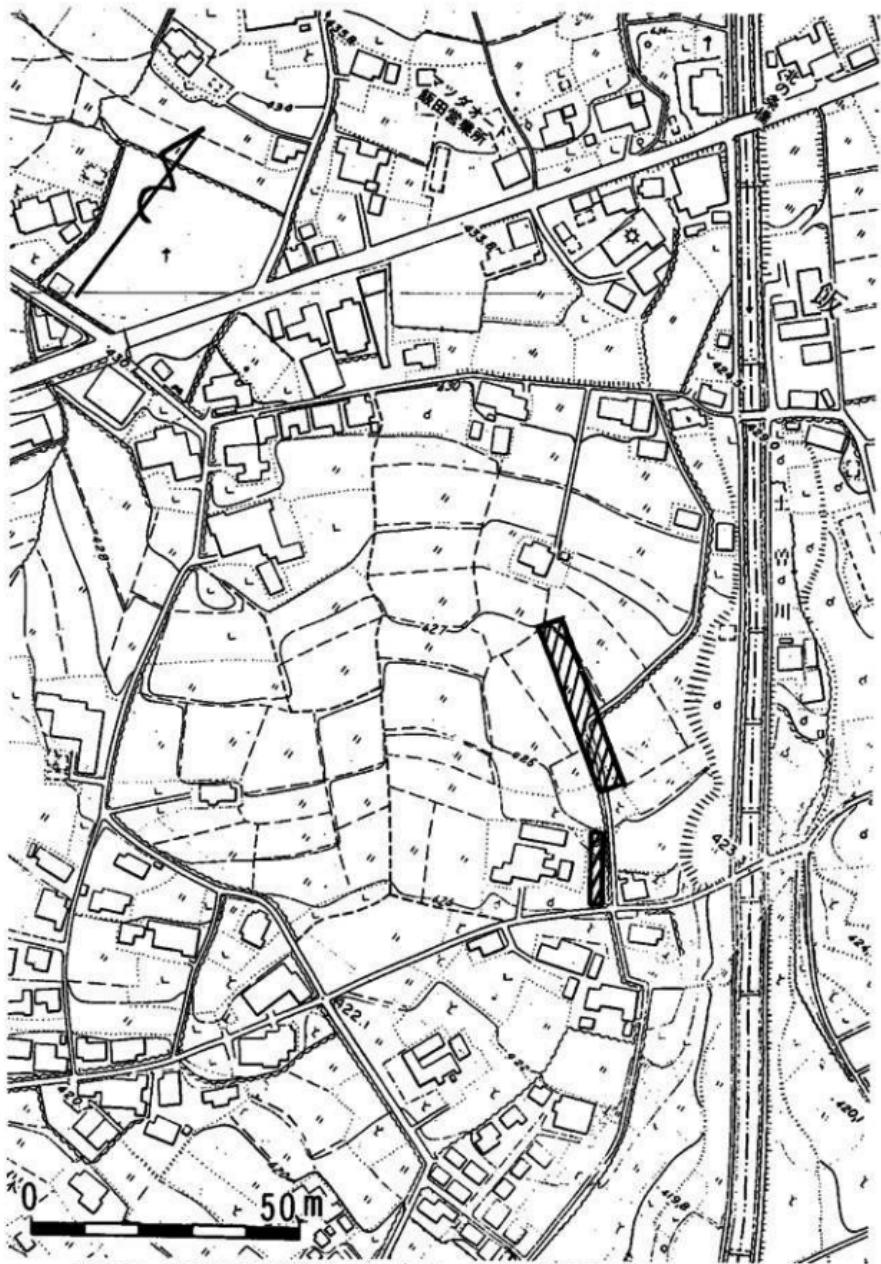


図1の2 堂垣外遺跡地形詳細図 (1:2,500)
(斜線部分が発掘調査区域)

2. 上郷町の考古学的調査

上郷町の考古学的調査で最も古い文献は、寛政5(1793)年飯沼天神塚古墳(雲形寺古墳)を発掘し、その出土遺物を5年後市岡智寛が「天神塚古墳の遺物」として写生したものである。その後大正13(1924)年、故鳥居藏博士が『上伊那の先史及び原始時代図版』を編纂するに際し、故市村成人氏と共に大正10~11年にかけて郡下を歩き、その折、上郷町の遺跡・遺物を見出している。上郷町出土の弥生時代遺物を学界に紹介した論文は、昭和17(1942)年、大沢和夫氏が『古代文化13の1』に発表した「信濃飯沼の弥生式遺物」で、丹保遺跡出土のものである。

戰後になると、昭和26~28年にかけて市村・大沢両氏を中心に『下伊那史第二・三巻』の資料収集のため郡下の古墳をめぐり、上郷町にも32基の古墳が存在したことを確認している(含埋滅古墳)。さらに、『信濃史料第一巻』が昭和31年に発行され、上郷町の遺跡は26ヶ所・古墳32基が登録されたのである。

昭和41年、的場遺跡中の飯沼2,509番地の松下幸氏宅地造成中発見された遺物は、その出土状況等から古墳時代の土器類の窯址出土品と判明した。しかも、湧水地が段丘崖面に点在し、この周辺一帯に大規模な集落の存在が推定されている。翌42年、文化財保護委員会が発行した『全国遺跡地図長野県版』には、遺跡数23ヶ所・古墳32基と記載されているが、机上作業であったため、地図上の位置等に問題が残ってきた。同年、中央道用地内の埋蔵文化財分布調査が実施され、それに伴う発掘調査が昭和45年長野県教育委員会により上黒田の赤坂遺跡で行なわれた。これが上郷町での最初の学術的発掘調査であったが、検出された遺構は中世末期の土間状遺構1軒のみであった。翌昭和46~47年にかけて、飯田高校考古学研究会(代表片山徹)は、クラブ活動の一環として、上郷町全域の分布調査を現地踏査の形で行ない、正確な遺跡地図を作成した。この時の遺跡数は68ヶ所・古墳32基である。遺跡は小字名毎に分割しており、今でも利用価値の高い資料として研究者の間で使用されている。高校生の調査としては注目に値するものであった。

昭和51年になると、高松原遺跡中の飯田高校第二グランド造成工事に伴う発掘調査が、大沢和夫氏を团长として実施された。『高松原—伊那谷弥生後期集落の研究』(昭和52年3月刊)によれば、縄文時代中期土壙85基・弥生時代後期住居址35軒・土壤2基・掘立柱建築址8基・圓溝遺構2基が検出されたほか、多量の縄文・弥生時代の遺物を発見している。翌昭和52年には今村善興氏が『上郷史』執筆のため、町内遺跡を一部実地踏査し遺跡分布図を作成している。さらに、昭和54年には岡田が『長野県史考古編』『下伊那史第一巻』編纂のための分布調査を、実地踏査をも含めて行ない、遺跡分布図及び遺跡一覧表を作成発表したのである。昭和55年になると、上黒田の姫宮センター裏側に老人福祉センターの建設が具体化し、今村・竹内稔の両氏を中心に調査団が結成され調査が進められた。その結果は『姫宮遺跡』(昭和57年2月刊)に詳しいが、遺構は窪穴址・溝状遺構及び集石炉しかなく、遺物も縄文時代の土器・石器と平安時代の須恵器及び灰釉陶器の発見があったにすぎなかった。しかし、この遺跡は縄文時代の各時期を通じて遺物の出土がみられ、その意味で注目されている。

昭和57年は上郷町にとって画期的な年であった。それは埋蔵文化財保護で最も基本的と言われる詳細分布調査を実施したことである。調査員には岡田・片山・下田の3人がなり、調査補助員に上郷町婦人学級の有志及び高校生を得て、しかも全町民の協力のもとにできたことは文化財保護の啓蒙面からも意義ある仕事であった。調査は全町内一筆調査という非常に詳細な分布調査で、遺跡の位置・範囲及び遺跡の時代と性格まで探究した内容で、その遺跡数は69ヶ所・古墳32基・城跡3ヶ所を確認するに至った。この年には、開発の進む南条地籍の一丁田遺跡と義越遺跡の試掘調査を分布調査の一環として実施し、土壤の層位



図1の3 上郷町跡分布図(下段) 1:15,000

(遺跡番号は町登録番号)

や遺物包含層等の深さの確認を一部で行なっている。

そして、昭和58年2月、飯沼丹保の堂塙外地籍に農業用道路を敷設するとのことで、佐藤赳信氏を団長に全面発掘調査を実施したのであった。

3. 歴史的環境

上郷町所在の遺跡は一般遺跡69カ所・古墳32基・中世の城跡3カ所の合計104遺跡である。一般遺跡を時代別にみると、縄文時代50、弥生時代47、古墳時代21、奈良・平安時代65、中世42を数えるが、単純遺跡は少なくその大半が複合遺跡である。ちなみに単純遺跡は縄文時代で2カ所、奈良・平安時代4カ所の6カ所しかなく、先住民がこの地を何回も利用していたことがわかる。

上郷町の歴史的変遷を概観してみると、現在のところ1万年以前の旧石器時代の遺跡・遺物はない。最も古の文化内容を持つものとしては、縄文時代草創期に比定される上黒田の姫宮遺跡出土の表裏縄文土器破片があるほか、相原A遺跡出土の石器剥片が注目されるだけである。次の縄文早期関係では、堂ヶ入・八王子・姫宮・米ノ原・見城垣外遺跡等から、押型文土器や織維を含む条痕文土器及び撚糸文土器が出土し、町内でも比較的山寄り地帯に古い時期の生活跡を認めることができる。さらに約6,000年前の縄文前期の遺跡は、八王子・姫宮・日影林・米ノ原・北ノ原・社宮寺原・大明神原・高松原の8遺跡である。いずれも上段の中位段丘と低位段丘I地帯にしかなく、今回の表面採集結果からみて、下段の飯沼・別府地域にまでは未だ前期の集落は発達していなかったことが想定される。しかし、次の縄文中期になると、低位段丘II地帯の南条面下段を除き、全地域内に遺物の散布がみられ、生活舞台の拡散化が目立ちはじめる。中期の遺跡49カ所中、その代表的遺跡は上黒田の日影林・八幡原、下黒田の栗屋元・大明神原、別府の中島・矢崎、飯沼丹保の堂塙外遺跡等であり、中でも栗屋元・大明神原遺跡は上郷町を代表する重要遺跡である。この後に続く約3,000～4,000年前の縄文後期には、今までの繁榮ぶりとは裏腹に遺跡数も遺物量も極端に減少する。町内で現在判明している遺跡は、上黒田の八王子・姫宮・八幡原・町張・下黒田の栗屋元・大明神原・高松原及び別府の中島の8遺跡である。縄文時代最終末の晩期に關係する遺跡は現在3カ所知られている。それは東海系の条痕文土器片を出土する上黒田の姫宮・平畠及び別府の中島遺跡である。ただ、南条の丸山俊一氏所蔵の独鉛石は、縄文時代後期乃至は晩期にみられる祭器であり、畿越遺跡出土品との話から、この周辺一帯も注目したい。

次の水稻栽培を経済基盤とする弥生文化の下伊那への波及は、弥生前中期のことであり、美濃・尾張・三河方面から東漸したものと考えられている。弥生時代600年間は、前期・中期・後期・と三区分されるが、上郷町内47カ所の遺跡は大半が後期に属し、中期の遺物出土地は現在のところわずかである。下伊那での前期土器は、豊丘村林里遺跡出土品を模式とする林里式土器で、東海地方の前期に比定される西志賀式土器を伴出する。この種の土器は現在上郷町では発見されていない。次の弥生中期は下伊那では土器の形式編年で四分割している。中期初頭に比定される飯田市松尾寺所遺跡を指標とする寺所式。喬木村阿島五反田遺跡をタイプステーションとする阿島式。高森町下市田北原遺跡を模式とする北原式。中期末葉に位置づけられる飯田市座光寺恒川遺跡及び上郷境の土曾川に近接する座光寺正泉寺遺跡出土の土器を指標とする恒川式である。この時期の町内遺跡としては寺所式土器片を出土した丹保の堂塙外遺跡、阿島式土器片の発見があった飯沼北の的場遺跡、北原式土器を出土する丹保遺跡、恒川式土器片を出す南条の畿越遺跡のほかに、別府の中島・ドドメキ・下黒田の高松原・目光原及び上黒田の五本木遺跡等々9遺跡が挙げられる。特に該期の遺跡の大半は下段の飯沼・別府地籍にあることから、低位段丘II地帯を中心として、更に発見される可能性が高い。後続する弥生後期200年間を、下伊那では座光寺原期と中島期に編年する。

前者は飯田市座光寺原遺跡出土の土器を標式とする時期であり、後者は同じく座光寺中島遺跡出土品を指標とし、共に下伊那の段丘区分で言う低位段丘Ⅰの伊久間原面に立地する。ここは高燥段丘でその生産様式も低位段丘Ⅱの飯沼面の如き低湿地帯とは異なり、単純に水稻耕作は考えられず、陸耕乃至は畑作等を考えすべき地域である。この時期、長野県下は千曲川水系の箱清水式文化圏と天龍川水系の中島文化圏の小国に分かれていたが、その根柢には生産様式の相違が認められる。上郷町内の弥生後期の遺跡は、実に44カ所、中期と重複するもの6カ所を含めて山麓の上黒田八王子遺跡から天龍川氾濫原に接する別府の高屋下、丹保の蔽上遺跡まで町内全域に広がっている。この時期の代表的遺跡は、下黒田の高松原遺跡と堂垣外遺跡を指呼のうちにみる飯沼の丹保遺跡及び南条の蔽越遺跡が著名である。

古墳時代は集落址と墓域とに区別される。上郷町の古墳は煙藏古墳を含めて32基、その大半が別府台地端に並び、一部下黒田地籍と飯沼北に散在する。いずれも後期古墳と想定され、天神塚古墳と番神塚古墳の2基を除いて円墳である。この時期の土器散布地は21カ所あり、うち14カ所は別府・飯沼地籍に所在する。その主要遺跡は南条の蔽越遺跡と飯沼北の的場遺跡である。前者は和泉期と鬼高期の、後者は鬼高Ⅱ期の土師器を多量に出土し注目されている。この古墳と集落のあり方から見れば、大和朝廷時代の上郷は下段の経済的基本盤かな地を豪族が占拠し、周辺一帯を支配しながら、次の時代にまでその権力を引き継いでいったものと推定される。

次の奈良・平安時代の遺跡数は町内に64カ所あり、4遺跡を除いて複合遺跡である。この時期の遺物は町内全域から発見されるが、中でも下段は大集落址が予想される地域である。例えば、別府と飯沼境を流れる栗沢川右岸にある高麗遺跡、座光寺との境界をなす土曾川右岸の堂垣外遺跡は、多量の須恵器片が散布し、上郷の歴史時代の二大重要遺跡である。この低位段丘Ⅱ地帯は、座光寺地区においても奈良・平安時代の遺物の散布が多く、今日、伊那郡衙址とほぼ断定される恒川遺跡群と段丘面は同一である。しかも、飯沼地区は古代条里制造構の存在を地割と地名から推測できるのに対し、上段地帯にはその確証がなく、古墳時代以降の中心的集落や水田址は、下段に求めざるを得ないようである。平安末期の1144年に作られた『伊呂波字類抄』に善光寺縁起が記されているが、それにはこの地方の郷名が登場する。

「推古十年信濃人若麻績東人、稷仏像於難波掘江、安之麻績郷字沼邑、後徒水内郡今善光寺是也。」

つまり、麻績郷字沼邑とあるのがそれで、現在の座光寺高岡付近から上郷町南条近辺一帯の低平な沼澤地帯をさし、現在の飯沼は字沼が転化したものと言われている。また、この地域には伊那郡衙を経て国府に至る官道東山道が通過していたと考えられ、飯沼・別府・座光寺一帯は相当の文化高揚地帯であったと推定される。以上みてきたような自然的・歴史的環境の中に堂垣外遺跡は立地しているのである。

参考文献

下伊那地質誌編集委員会編『下伊那の地質解説』(昭和51年8月)

上郷町編『1,981上郷町勢要覧』(昭和56年12月)

飯田高校考古学研究会編『考古学研究会誌第1号』(昭和47年7月)

大沢和夫・宮沢恒之他『高松原』(昭和52年3月)

上郷史編集委員会編『上郷史』(昭和53年5月)

上郷町教育委員会『姫宮遺跡』(昭和57年2月)

上郷町教育委員会『上郷町遺跡詳細分布調査カード』(昭和58年3月)

上郷町遺跡一覧表 (表1)

(下段を中心とする遺跡番号は町登録番号)

番号	種別	時代				名 称	所 在 地	地 目	備 考
		縄文	弥生	古墳	奈・平・中世				
30	包蔵地	○	○		○	○	桜 烟 遺跡	下黒田 桜 烟	烟・田・宅地
31	"	○		○	○	○	梶垣 外	" 梶垣 外	" " "
32	"	○	○	○	○	○	砂 原 田	" 砂 原 田	" " "
33	"		○		○		中 烟	" 中 烟	田 "
34	"	○	○		○	○	三 反 田	" 三 反 田	" " "
35	"	○	○	○	○	○	高 松 原	" 高 松 原	" " 昭和51・58年調査
36	"	○	○		○		日 光 原	" 日 光 原	" " "
37	"	○	○		○	○	川 底	" 別 府 川 底	田 "
38	"	○	○	○	○		ドドメキ	" ドドメキ	" " "
39	"	○	○	○	○	○	中 島	" 中 島	" " "
40	"	○	○		○	○	化 石	" 化 石	" " "
41	"	○	○	○	○	○	宮 垣 外	" 宮 垣 外	" " "
42	"	○	○	○	○	○	矢 崎	" 矢 崎	" " "
43	"				○		兼 田	" 兼 田	" " "
44	"				○		渡 場	" 渡 場	" " 宅地
45	"		○	○	○	○	高 屋 下	" 高 屋 下	" " "
46	"	○	○	○	○	○	高 屋	" 高 屋	" " "
47	"	○		○			櫛 田	飯沼南条 櫛 田	" " "
48	"			○			竹 ノ 内	" 竹 ノ 内	" " "
49	"	○	○	○	○	○	北 浦	" 北 浦	" " "
50	"	○	○	○	○	○	びくに烟	" びくに烟	" " 昭和57年調査(試掘)
51	"	○	○		○	○	一 丁 田	" 一 丁 田	" " "
52	"	○	○	○	○	○	蔽 越	" 蔽 越	" " "
53	"	○	○	○	○	○	雲 彩 寺	" 雲 彩 寺	" " "
54	"	○	○	○	○	○	堀 尻	" 堀 尻	" " "
55	"	○	○		○		南 原	飯沼南 南 原	" " "
56	"	○		○	○		ヒ エ 田	" ヒ エ 田	田 "
57	"	○			○		芝 崎	" 芝 崎	" " "
58	"			○			御 蔵 前	" 御 蔵 前	田 "
59	"		○	○	○	○	的 場	飯沼北 的 場	" " "
60	"			○			釜 ノ 口	" 釜 ノ 口	田 "
61	"			○			院 下	" 院 下	" " "
62	"	○	○	○			西 浦	" 西 浦	田 "
63	"	○	○		○	○	ママ下	" ママ下	" " "
64	"	○	○	○	○	○	堂 垣 外	飯沼丹保 堂 垣 外	" " "
65	"	○	○	○	○	○	丹 保	" 中 島	" " "
66	"	○		○	○	○	矢 鶴	" 矢 鶴	" " "
67	"	○		○	○	○	櫛 爪	" 櫛 爪	" " "

番号	種別	時代				名 称	所 在 地	地 目	備 考
		縄文	弥生	古墳	奈・平・中世				
68	包蔵地	○		○	○	長 橋 遺跡	飯沼丹保 長 橋	畠・田・宅地	
69	-	○		○	○	蔽 上 *	* 蔽 上	* * *	
70	古 墓		○			浅 間 塚 古 墓	下黒田 浅間塚2479	* 山林	
71	-		○			不 二 塚 *	飯沼南 フジ塚3205	宅地・山林	
72	-		○			塚 田 *	飯沼北 ツカ田2759	田	
73	-		○			門 前 *	* 門前2499の1	原 野	別称鶏足院古墳
74	-		○			天 神 塚 *	飯沼南条天神塚3334	墓地・山林	* 霊寺寺古墳
75	-		○			中 し ま *	* 中島3259	*	* 中島第11号古墳
76	-		○			化 石 第 1 号 *	別府 化石1729の4	*	* 血とり塚の塚
77	-		○			化 石 第 2 号 *	* * 1741	*	
78	-		○			番 神 塚 *	* 北村1683	宅地・畠	
79	-		○			水 口 の 塚 *	* 水口1327	原 野 *	旧 溝口の塚
80	-		○			弓 矢 *	* 弓矢1240	宅 地	
81	-		○			川 底 *	* 川底		
82	-		○			ドドメキ第1号 *	* ドドメキ2245	宅 地	
83	-		○			* 2 *	* * 2231	*	
84	-		○			* 3 *	* * 2226	*	
85	-		○			* 4 *	* * 2222	*	
86	-		○			聖 貴 塚 *	* 横戸2191	畠・田	
87	-		○			中島第1号 *	* 中島2170	宅 地	
88	-		○			* 2 *	* * 2165	*	別称玄闇塚古墳
89	-		○			* 3 *	* * * *	*	
90	-		○			* 4 *	* * * *	*	
91	-		○			* 5 *	* * * 2059	畠	
92	-		○			* 6 *	* * * 2055	原 野	
93	-		○			* 7 *	* * * 2064	宅 地	別称藤塚古墳
94	-		○			* 8 *	* * * 1791	*	
95	-		○			* 9 *	* * * 1792	*	
96	-		○			* 10 *	* * * 1794	畠	
97	-		○			中 井 *	* 中井1838	宅地・神社	別称天王原の塚
98	-		○			庚 申 原 *	* 庚申原1366023	畠・*	* つくね塚
99	-		○			宮の前垣外 *	* 宮の前垣外1194	宅地・*	
100	-		○			鳥 屋 塚 *	* 鳥屋塚750	墓 地	
101	-		○			久 保 *	* 久保782	*	
102	城 跡			*	○	原 の 城 跡	下黒田 原の城	畠・宅地・山林	
103	-				○	飯 沼 城 跡	飯沼南 電板森	* * *	
104	-				○	古 城 跡	* 古城	* * *	

II 発掘調査経過

飯沼丹保の堂垣外地籍に昭和57年度事業として町道が開設されることになった。この地籍は57年度上郷町埋蔵文化財包蔵地分布調査によって発見された堂垣外遺跡の所在地である。分布調査を担当された岡田正彦氏は上郷教育委員会に、工事着工前の発掘調査の必要性を申し入れ、町費単独負担で調査を実施したのが本次調査である。

発掘調査は昭和58年2月5日より2月17日にわたって行ない、この間、小雨・雪あれの日が続き、作業は容易でなかった。

発掘調査日誌

月・日	天候	日誌
1 29	晴	上郷教育委員会で佐藤・岡田出席、調査についての打合せ会を行ない、現地を視察、調査区域・テント位置を決める。
2 5	晴	器材運搬・テント設営、I調査区にグリッド設定。午後よりグリッド調査にかかる。砂層よりの遺物多し。
6	くもり 小雨あり	I区グリッド調査、建物址ともみるを検出、須恵器の大片あり、住居址ともみる落ちこみあり。調査拡張部をミニバックホーンで排土する。
7	朝雨・晴・時々 小雨・雪あれ	休み
8	終日雪荒れ 寒い	I区A～T列の断面調査、全面の排土作業。II調査区グリッド設定調査にかかる。
9	雪 あ れ 雪 あ れ 雪 あ れ 雪 あ れ 雪 あ れ	I区上層の測量、1号住居址検出調査、砂利層よりの弥生中期後半土器片多し II区グリッド拡張調査、須恵器片出土量多いが遺構発見にいたらず、ミニバックで全面の排土。
10	終日雪あれ	1住調査、ミニバックで西と北の土手を排土、2住を検出する。II区ミニバック排土あとを全面調査、3住を検出する。東側には遺物なくなる。
11	晴・くもり 夜雪	休み
12	雪 あ れ	1住完掘、2住調査、西側の疊層調査——北原式土器片多し。土壤3・4・5号検出調査振り上げ。6住検出調査。II区3住調査、4住検出調査。切りあり複雑となる。5住検出。
13	雪 あ れ	休み

月・日	天候	日誌
2 14	晴	3住・4住完掘、写真撮影・測量。5住の調査、遺物（奈良期）多し。6住完掘、写真・測量。土壤3・4・5号測量。さきに建物址とみたは土壤群となり遺物多し。西端疊層調査。
15	午前にわか雨 午後くもり晴	5住完掘、写真・測量。3住・4住を切る溝址Iを検出調査。土壤6・7号検出。掘上げ、測量・写真。土壤群完掘、写真撮影。西端疊層は流失遺構となる。
16	晴	溝址I調査掘上げ、弥生恒川式壺片多し。土壤群測量、1住・2住、西端流失遺構完掘、写真撮影・測量。3住・5住のカマドたち割調査、断面図。午後、テント・器材を撤収する。
17	くもり・雨	I区遺構分布測量、西端の土層断面図。
18	朝霧 晴時々小雨	休み
19	くもり雪あれ	溝址I測量、II調査区断面図、II調査区遺構分布測量。現場調査完了。

その後、遺物・遺構図の整理をなし、58年度にはいって、遺物作図・製図をなし、報告書作成にとりかかる。

III 発掘調査結果

堂垣外遺跡は、北に接する土曾川の自然堤防上の氾濫堆積の上に立地している。今次調査は町道開設長さ230m、幅4.5mの限定された範囲であり、西2分の1は農道の拡張であり、宅地もあり、遺物散布の少ない所である。東側は農道と水路の拡張である。このため、調査の重点は中央部の水田におかざるを得なかった。図2にみると調査区I・IIに重点をおき、IIIはトレンチ調査、IVは工事中の立合調査とした。

I・II調査区の土層（図3）をみると、耕土下の第2層はIでは暗黒色土（ローム混り）、IIでは暗赤褐色土があり、第3層から変化は大きく、古い時期の氾濫堆積による砂質土が主体をなし、遺物の多くはこれら砂質土に包含されている。下層は水成ロームとなり、遺構はそれを掘りこんでいるのが大半である。

III調査区のトレンチ調査は、かつての水路跡で荒れており、須恵片数点があったが遺構をみるとできなかった。IV調査区の工事中立合調査では側溝の掘り込みを調査するが、礫混りの暗褐色土で遺構、遺物をみるとできなかった。

堂垣外遺跡において本次発掘調査された遺構は次のような。（図4）

- 1 住居址 6 — 弥生中期…2 奈良時代…1 平安時代…3
- 2 流失遺構 2
- 3 土 壤 23
- 4 溝 址 1

1 弥生時代

(1) 住居址

1号住居址(図5)

I調査区の西端に発見され南北推定3.9m×東西3.15mの隅丸長方形をなし、水成ロームに東壁35、西壁15cm掘りこむ竪穴住居址である。覆土上層には多くの礫があり、土曾川氾濫を示すものである。床面は堅く、主柱穴は4ヶ、炉址は中心より北西に片寄ってあり、浅い掘りこみの地床炉で灰が充満し、焼土はない。

遺物(図12・13) 土器には壺・甕・台付甕・鉢がある。壺(図12の1~35)の胎土には大粒の長石粒が入り、口縁部はわずかに外反し、口頭部は太短かく、胴部は肩部から大きく開き、ほぼ胴中央部に最大径をもち、小さな底部へとちぢまる器形をなすとみる。文様は櫛状工具を主体にヘラ描き文が共存する。間をおいた横走文の上下に刺突文・ヘラ描き短線文をつけ、肩部にヘラ描き三角文をめぐらすが大半を占める。横走文を縦に切り、その下に斜条線の交叉文をもつ(12)、横走文間を横位の練衫文でうめる(24)、波状文を施す(25)例がみられるが、北原式の器形・文様をもつものである。

甕(図13の1・2、6~10、図12の36~42) 胎土は壺と異なり、小粒の長石粒を含むが、内外面とも器面調整されている。口縁部は外反し、頭部がしまり、胴部は中央部で大きく張るIと、口縁部と胴部がほぼ同じ大きさとなるIIがある。Iの図13の1は口径20cm、胴最大径23.2cm。胴下部へ直線的に下がるとみられ、後期にみる台付甕の器形に類似する。14の台部が付くものともみられる。文様は櫛状具による横走波状文が口縁部と胴上半部に施文され、器形・文様は土曾川北対岸の正泉寺出土の甕に類例をみる。IIには図13の2・7があり、7は口縁部を欠くが、2の口唇には刻目文がめぐり、頭部直下に荒い横走波状文が施されている。

深鉢(図13の3~5)は無文であり、甕との器面

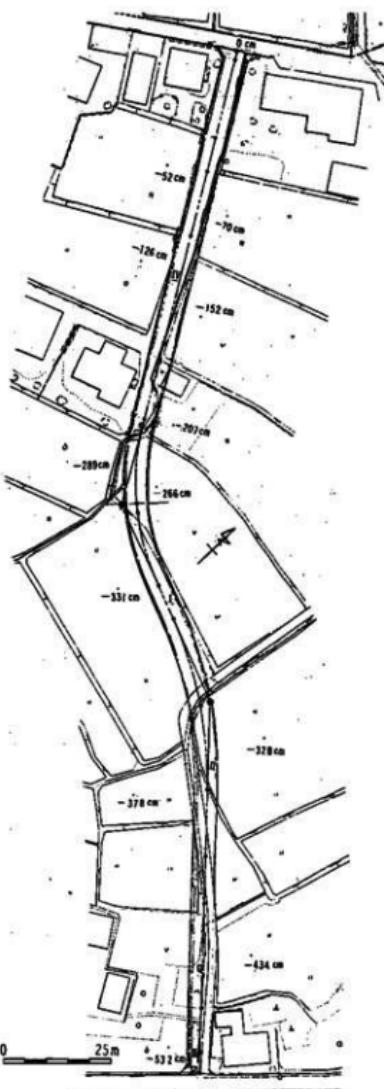
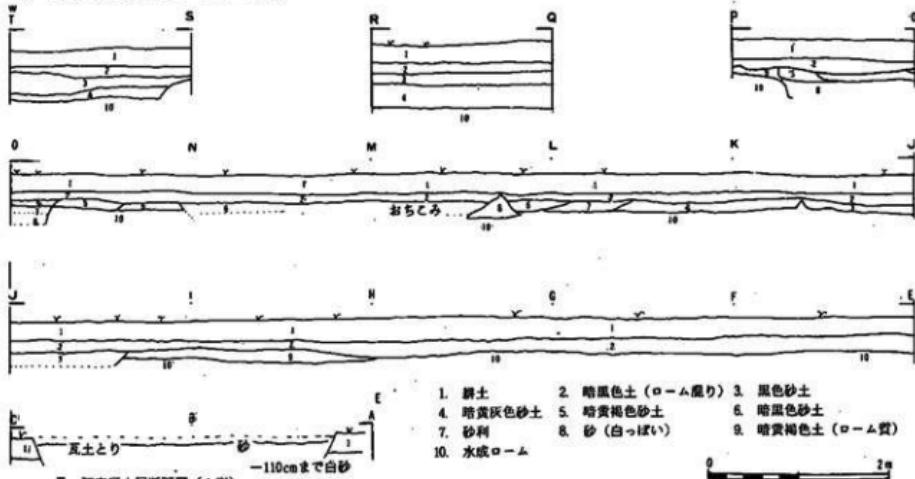


図2 常垣外地籍 町道新設計画図
I・II・III・IV—調査区
(数字cmは0点よりの比高差)

I 調査区土層断面図 (A~Tグリッド間)



II 調査区土層断面図 (A列)



図3 堂垣外I・II調査区土層断面図



図4 堂垣外遺跡発掘調査構造分布図

は同じである。炭化物の付着がみられる。台付壺の台部 (13の14~16) 14は1の壺に付くとみられるもので、上げ底をなし、布痕がつく。15は大形であり、台付壺に付くかは不明である。16は脚部の短かく小形の壺に付くものとみられる。

底部 (図13の17~25) には壺と壺・深鉢があり、17~21は壺底部、22~25は壺・深鉢の底部である。木葉痕・布痕・薬とみる圧痕がある。

壺・深鉢の文様に図12の36~42があり、櫛状具による36・37・39、浅い条線がつく38・40~42があり。古い要素をもつものとみられるが、北原式の特徴的な櫛状具による羽状文が施文されるものは28の1点の

みである。

図13の12は中島式の壺、11の太い波状文は壺の肩部であり、弥生後期のものである。

2号住居址（図5）

1号住居址に南の1部は切られ、北は用地外にかかり、2分の1の調査となった。東西3.6mの隅丸方形をなし、水成ロームに東壁で30cm、西壁で15cm掘りこむ竪穴住居址である。床面は堅く、壁ぎわに2柱穴がみられ、その配置から主柱穴は4ことみる。炉址は用地外に2分の1はかかりますが、住居の中心よりやや北に寄る位置にあるとみられ、浅い掘りこみの地床炉である。

遺物（図14・図17の7）土器には深鉢・壺と僅か壺片がある。深鉢（図14の1・5～12）は口縁部は緩く外反し、壺（2～4）は頸部がしまって口縁部はくの字状に外反し、胴部はあまり張らないとみられる。鉢・壺ともに比較的大粒の長石粒を含み、内外面とも整形され、文様は櫛状具による条線が胴下部にまで施文され、口唇に刻目文を施すが大半を占め、9は凹圧文を、10は繩文が施され、内面に刺突文が付くが

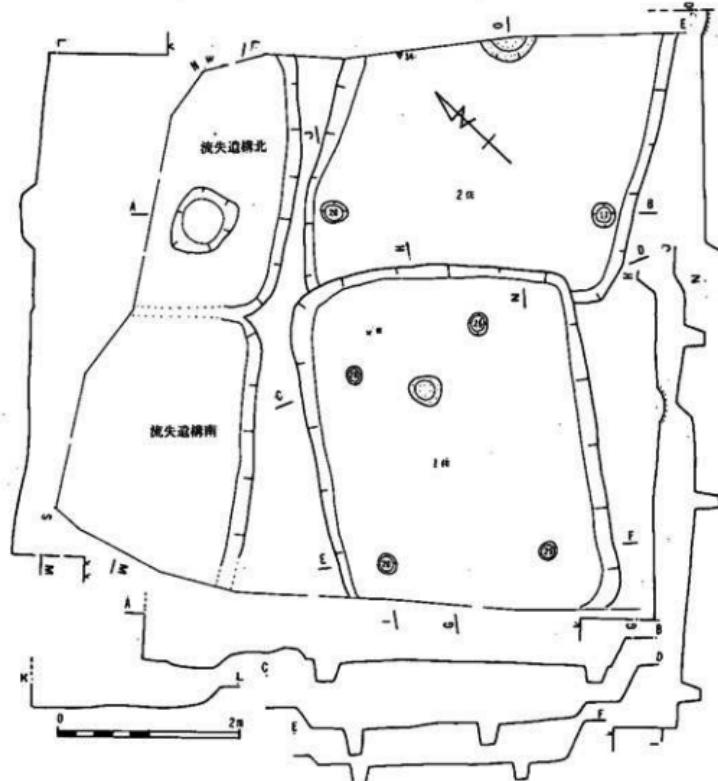


図5 堂垣外1号・2号住居址、流失遺構北・南

みられる。

壺には13・19・20があり、13は壺の口縁部で短い縦の2条の貼付文が四单位に施される類例の少ないものである。19は肩部で半截竹管による沈線が縦と斜に施され、20は胴部片、磨消繩文を沈線で切るものである。

石器は少なく、図17の7は上層出土の石鎌で刃部を僅かに欠く、図14の24・25の横刃形石器は種つみ器に使用されたとみられる。

2号住居址の遺物からみて壺には寺所式に類似がみられる。壺形土器は阿島式ではなく、北原式に出現をみるものであるが、本址では壺の出土をみ、その文様構成は阿島式であり、深鉢の9は寺所式ともみられるが阿島式である。石器の横刃形石器は打製石庭丁とみるもので阿島式にみるものである。以上からみて阿島式の住居址とみるが妥当と思われる。

(2) 流失遺構(図5)

調査区域の西端部に発見され、西は一段高くなり、既に工事の遺形が組まれており、調査不能であった。図6の断面図でみると大半は氾濫砂礫で埋まり、その下層から下部の粘質黄赤色土に至る間に多くの遺物の出土をみている。調査結果、北と南に別れて隅丸方形とみえる2遺構があったとみられ、土曾川氾濫による土石流に流されたと推測される。遺構の存在を知るのは東側中央部にコーナーをもつこと以外にはない。

遺物(図16) 流失遺構北よりは1~9の深鉢がある。口縁部は緩く外反し、胎土は小石粒を含み、内外面とも整形され、焼成は堅い。1は櫛状具による斜条痕文が施され、口縁内面には櫛状具の先端による縦の刺突文がめぐる。2~7は口唇に押圧文・刻目文がめぐり、櫛状具による条線・条痕が施され、阿島式に比定されるものとみる。

流失遺構南の土器(10~35)には壺・深鉢・浅鉢がある。壺の文様は一見北原式とわかるものであるが、19の折り返し口縁をもつ時期は不明である。深鉢・壺には32・33が図示できるもので、胎土は製造され内外面とも整形され、32は細い縦の条線が、33は波状短線文をめぐらす。34は無文の浅鉢である。

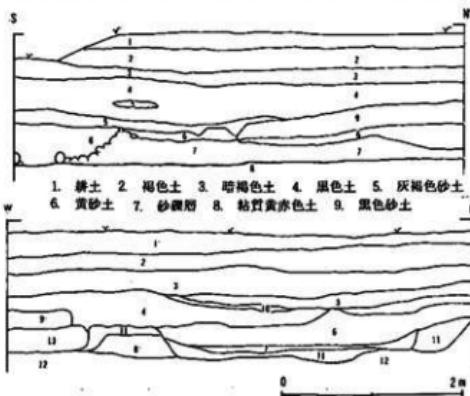


図6 堂垣外遺跡流失遺構土層断面図

(3) 溝址1号(図7)

3号・4号・5号住居址の1部が上にのり、北と南は用地外となつた。調査したのは南北10.8mの範囲である。N20°Wの方に向に幅70~120cm、深さ30~40cm掘りこむ溝址である。水の流れた痕跡はみられない。遺物(図17の1~4・9・10・18、図15の1)は溝壁と底に着いて発見された。1の大形壺は4個所に分散してあり、口縁部を欠き、胴中央部に最大径をもち、小さな底部をなす。胎土は大粒の長石粒を含み、焼

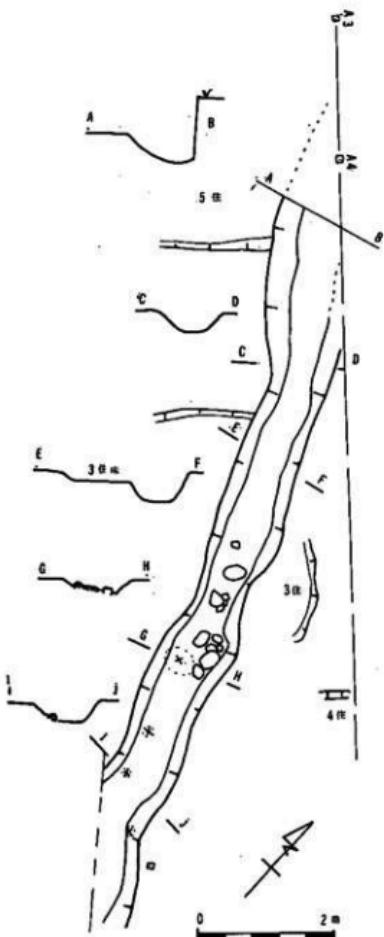


図7 堂垣外溝址1号

3基の土壇は大きな掘りこみの中に、さらに掘りこみをもって分かれている。底に石器1こを置く共通点と、4号・5号にみる一抱大の石を置いている点は注目される。

土壇17号（図11）

土壇郡の北側にあり、平安期の土壇15号の北に隣接している。南北55、東西85cmの椭円形をなし、水成ロームに深さ21cm掘りこみ、主軸方向N75°E。遺物（図15の5～7）には5のボタン状の貼布の付く壺片、6の高杯片、7はミニチュア土器片で恒川式とみる。

成は堅い。文様は櫛状具により肩部は三角区面文が、その内部を短線文で埋め、その下に細い横走文がめぐらし、三角区面と接する部分にボタン状の貼布を施し、その下に波状文をめぐらし、胴上半部下よりは無文となる。18は小形壺肩部片で籠描きによる条線がみられる。ともに恒川式にみる文様である。

石器には図17の2・3の石鋤、4の打石斧、10の敲打器、8は石庖丁とみる横刃形石器、図15の1の打製石庖丁の出土をみている。遺物の出土状況からして、溝址は祭祀的性格をもつものとみられ、方形周溝墓とも思われたが、調査範囲の制約もあり、その性格を把握するにいたらなかった。

(4) 土壇

23基よりなる土壇群と3基よりなる土壇が調査されているが、弥生期とみるは、3号・4号・5号・17号・19号土壇であり、他は平安期である。

d 土壇3号・4号・5号（図8）

土壇群の西4mに南北方向に南から3号・4号・5号と並ぶ。3基とも水成ロームに掘りこまれ、3号は南北73cm、東西90cmの円形、深さ52cm、主軸方向N60°E、中央底に打石斧（17の13）1こが置かれていた。4号は南北160cm、東西190cmの隅丸方形をなし、深さ70cm、主軸方向N58°W、底について石鋤（図17の8）があり、一抱大の石1こが置かれていた。5号の北は用地外にかかる。東西135cmの円地をなし、深さ65cm、主軸方向N65°W、中央部底に刃部を欠く小形石鋤（17の7）があり、一抱大の石1こが置かれている。

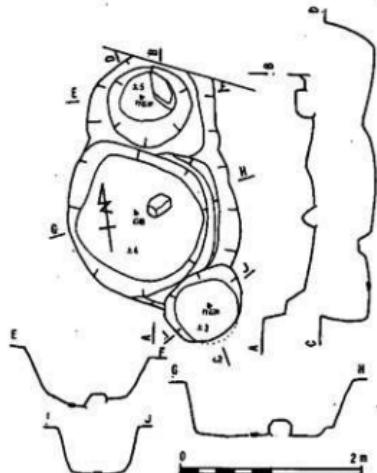


図8 堂垣外土坑3号・4号・5号

土壤19号(図11)

土壤群のほぼ中央部にあり、平安期の土壤14号に東側の1部は切られている。南北92cm、東西推定70cmの楕円形をなし、主軸方向N10°E、水成ロームに12cm掘りこむ浅い土壤である。遺物(図15の2~4・図17の6)には底に付いて図17の6の石鋤と図15の2の打製石庖丁が出土し、3は磨製石鋤の末製品、4は壺片で波状文とボタン状の貼布があり恒川式とみるものである。

他に土壤群上層、土壤20号の西40cmより図17の5の石鋤の出土をみている。

堂垣外遺跡出土石器一覧表(表2)

硬…硬砂岩 緩…凝灰岩

遺構図	図No	No	器種	材質	長さ(cm)	幅(cm)	重量(g)	備考
2住	14	24	横刃形石器	硬	3.5	8.0	26	石庖丁とみる
"	"	25	"	"	3.8	7.0		"
"	17	7	石鋤	"	18.5	8.0	525	刃部欠け
溝址1	15	1	打製石庖丁	"	3.7	5.2	21	
"	17	2	石鋤	"	13.0	7.0	280	刃部を欠く
"	"	3	"	"	27.0	8.7	700	
"	"	4	打石斧	緩	7.8	4.5	42	基部を欠く 刃部土ずれ
"	"	9	打製石庖丁	硬	6.6	8.5	52	
"	"	10	敲打器	緩	33.4	6.2	1,180	
土壤19	15	2	打製石庖丁	硬	4.0	7.0	35	
"	"	3	磨石鋤未製品	硅質頁岩	6.1	2.2	10	
"	17	6	石鋤	硬	17.8	8.2	473	
土壤群上層	"	5	石鋤	"	17.8	8.7	327	
土壤3	"	13	打石斧	"	10.1	3.7	60	
土壤4	"	8	石鋤	"	7.1	7.0	255	刃部を欠く
土壤5	"	17	打石斧	"	8.9	4.7	135	"
流失遺構	"	15	"	"	7.1	5.0	155	基部欠け
"	"	16	"	緩	7.8	5.3	98	刃部土ずれ
3往上層	"	11	"	硬	10.3	4.0	30	
5往上層	"	12	"	緩	10.4	5.0	72	
土8上層	"	14	"	"	11.7	3.6	121	刃部土ずれ

2 奈良・平安時代

(1) 住居址

5号住居址(図9)

II調査区の西側に発見され、北3分の1は用地外になる。東西5.5m×南北推定4.5mの隅丸長方形をなし、水成ロームに15~20cm掘りこむ奈良時代の竪穴住居址である。床面は堅く、主柱穴は2つが発見されているが、配置から4つとみられる。西壁に付いて粘土カマドが付き、その南側に浅い掘りこみの穴があるが、灰溜とはみられない。カマド北側と東壁に沿って遺物の多くが出土している。

竪穴住居址をとりまくように8つの柱穴が並ぶが、本址に関連するか、その後の別の造構に付くものか、十分な把握に至らなかったが、住居址上層より平安期の灰釉陶器・須恵器・土師器の出土をみ、その期の建物址が存在されたものとも思われる。

遺物(図18) 須恵器と土師器があり、2は大形壺、胴部に格子目ふう叩目文が付く。1の鉢は口径21.5cm、高さ10.2cm青白色を呈し、胎土には小石粒を含む。頸部はしまって口縁部はくの字状に外反し、胴部最大径は肩部にあり、口径と同じである。底部は刷毛ナデツケにより整形されている。7~10は蓋杯、7は身と蓋の付くものであり、身は立ち上がり口辺をなし、削り高台が付く。口径13cm、高さ5.2cm、外面に火薙が僅かにみえる。蓋は、径13.8cm、高さ4cm、内部が凹むつまみが付く。共に朱彩されたともみる赤色を呈し、身に細い刃によるけ状の、刻印がつく。胎土は小石粒を含む。8の蓋は径13.8cm、高さ3cm、胎土に小石粒を含み、焼成は堅く、つまみには伏鉢状の凸起が付く。

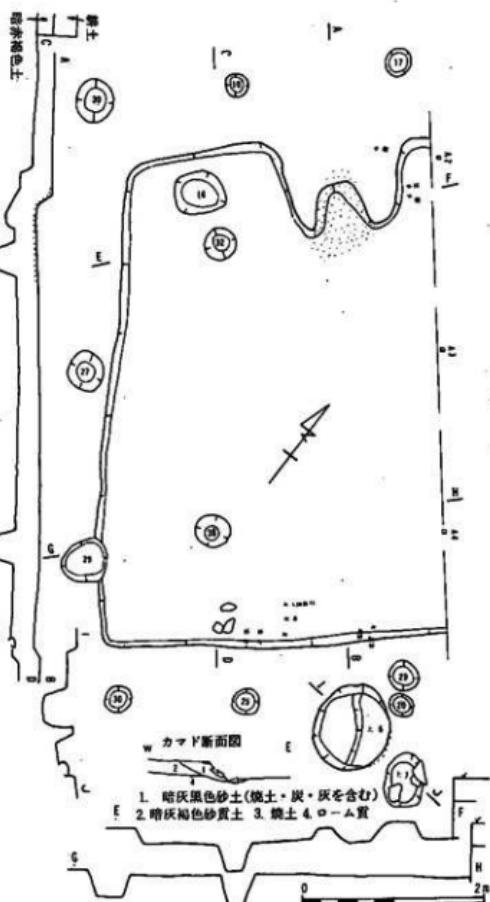


図9 堂垣外5号住居址、土壤6号・7号

杯には9~12があり、底部は窓削り、9は口径14cm・高さ3.7cm胎土は良く、内面に漆が入れられたとみる痕跡をもつ。10は口径13.1cm、高さ4.25cm、胎土に小石粒を含み、焼成堅い。11は口径16.5cm・高さ4.5cm生焼けであり、12は口縁部を欠く。覆土出土の須恵器片に3~6があり、3・5・6は壺片、4は壺片とみるもので、胎土・焼成良好、波状文、沈線が施され、時期的にやや古いとみる。土師器に13~15の変形と図示外に壺の破片10数点がある。須恵器の大半は美濃須衛窯産とみられ、土師器は真間式であり、奈良時代のものである。

上層出土に16~18の須恵器と19・20の国分式の壺、20の灰釉陶器底部があり、平安時代のものであり、壁穴住居址を囲む柱列に伴なう遺物とみたい。

3号住居址（図10）

II調査区中央部-A 6・7グリッドに発見され、東35cmに4号住居址がある。北側の1部は弥生中期の溝址の上にのる。南北3.45×東西3.6mの隅丸方形をなし、水成ロームに15~20cm掘りこむ平安時代の壁穴住居址である。床面は堅く、柱穴は検出されなかった。テラス上にあるとも思われたが発見に至らなかつた。カマドは北壁の西に片寄ってあり、大形の粘土カマドである。その東側に隅丸方形の灰溜の掘りこみが付く。

遺物（図19の14~20）は少なく、須恵器・土師器・灰釉陶器片がある。16は灰釉陶器の底面で東濃産である。15・17~20は須恵器。14の杯は地方産、胎土・焼成は良くない。15は皿とみられる底部で地方産。17~19は美濃須衛窯産、20は地方産である。土師器は小片の国分式10数点あるが図示しなかつた。

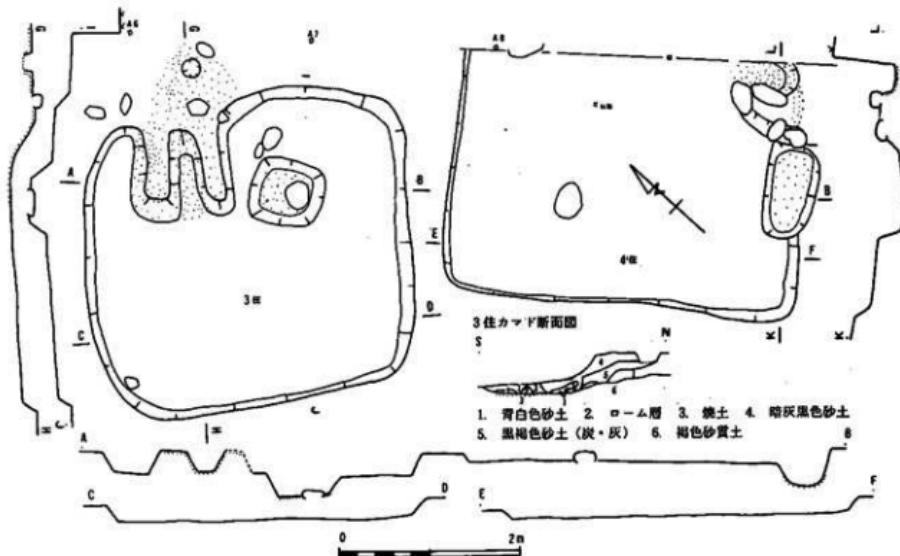


図10 堂垣外3号・4号住居址

4号住居址（図10）

3号住居址の東35cmにあり、北3分の1余は用地外のため調査不能。東西4m、水成ロームに15~20cm掘りこむ平安時代の堅穴住居址である。南の1部は弥生時代中期の溝址の上にのる。床面は堅く、柱穴は検出されなかった。カマドは東壁の中央よりやや北によってあるとみられ、2分の1は用地外となる。石組粘土カマドである。その南に長椿円形の灰溜が付く。

遺物(図19の1~13) 須恵器・土師器・灰釉陶器がある。須恵器には1・6・11の壺片、2・4の直口壺片、5の皿、7の杯片等があり、地方產に美濃須衛窯産が混じる。灰釉陶器には8の壺胴部、9の瓶子底部、10の碗底部があり、東濃產である。土師器片は多く図示したのは12・13であり、12はロクロ形成の小形壺、13は国分式壺片である。

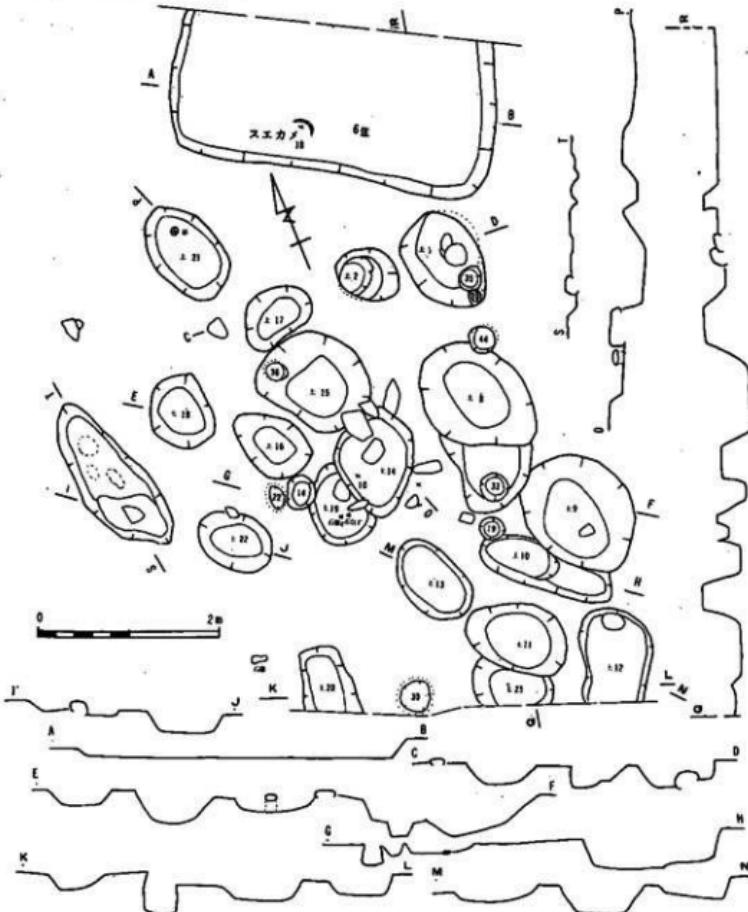


图11 堂垣外6号住居址，土壤群

6号住居址(図11)

1調査区中央部に発見され、北側2分の1以上は用地外となる。南は土壌群に隣接している。東西3.6mの隅丸方形をなし、西壁で10cm、東壁で20cm水成ロームに掘りこむ平安時代の堅穴住居址である。床面は堅く、柱穴は発見できず。カマドは用地外にあって不明。

遺物(図20)には須恵器と土師器があり、須恵器壺1は口径31cmの大形であり、胎土に小石粒を含み、仕上り・焼成は良い。破片には4~7があり、胎土・焼成良好なものである。蓋杯の蓋部2・3はつまみを欠き、地方産の胎土・仕上りは良くない。10は盤の底部、ナマ焼である。杯底部9は糸切り底、11は高台をもち、ともに地方産である。8は器形は不明であるが、表面には自然釉がたっぷりかかり、内面に青海波文がつく。土師器14は小形壺、13は小形杯とみられ、図示外に小破片数点の土師器片があり、いずれも国分式である。

平安時代土壙群及び土壙6号・7号一覧表

土壙群 No.	図 No.	大きさ 南北・東西 (cm)	深さ (cm)	形 状	主軸方向	遺 物	遺物図 No.	備 考
土壙群								
1	11	113×81	30	楕円形	N5°W	なし		中央底部に3つの石 南に柱穴2つ
2	~	70×60	27	~	N60°W	~		2段に掘りこまれ両側 壇状になる
8	~	145×110	45	~	N2°E	須恵器壺片2 杯片2	23の 1~4	南に浅い掘りこみと柱 穴1つつく
9	~	145×115	42	~	N15°W	須恵器短頸壺片 杯3 土師器底 弥生底	23の 5~9	底に石1つ 図23の9は弥生中期底
10	~	50×152	45	長楕円形	N46°W	なし		2段に西におちる
11	~	75×115	32	楕円形	N50°W	~		
12	~	推定 115×80	23	長楕円形	N25°E	須恵器長頸瓶、甌、杯、壺 灰釉陶片、土師器片多い	21	南の1部用地外 北側底に石1つ
13	~	102×63	19	楕円形	N18°W	なし		
14	~	120×86	16	変形楕円	N16°E	須恵器壺・杯	23の 10~13	上部に石2つ 土19を切る
15	~	130×94	31	~	N25°W	須恵器壺・杯・壺・高杯片 土師器杯、灰釉壺底部	22の 1~13	北西に柱穴1つ
16	~	93×62	34	楕円形	N40°W	須恵器小片2		
18	~	81×67	17	~	N15°W	なし		
20	~	推定 110×60	17	隅丸長方形	N8°E	須恵器杯片1	23の16	南は用地外となる
21	~	142×90	15	長楕円形	N20°W	須恵器杯(内部にウルシ が入る)、皿底部、壺片	23の10 14~15	裏は土14とつく
22	~	80×65	22	楕円形	N44°W	なし		
23	~	?×90	25	~	N50°W	須恵器壺・杯片多し	23の 17~24	北側は土11の下に 南側の1部用地外

土壙群上層より図24の須恵器壺・蓋杯・高杯・杯片多く灰釉陶器杯片の出土をみると

6	9	92×83	12 37	楕円形	N32°W	須恵器壺把手部 壺・杯片・底石1	22の 14~17	2段に掘りこむ
7	~	60×43	20	~	N34°W			石3つが置かれる

平安時代土壙出土遺物には須恵器を主に土師器・灰釉陶器・綠釉陶器があり、ほとんどが破片である。須恵器には壺・短頸壺・長頸瓶・高杯・蓋杯・杯・瓶等がある。

須恵器の主なものをあげると、図23の10は土壙21号と14号よりも1つになったもので、口径31.6cm、胴部を欠く。胎土灰白色・黒班多く含み、焼成仕上り良好であり、口縁部に13~15本位の櫛描波状文を3段にめぐらす。頸部から肩部に濃緑色の自然釉がかかり肩部に平行叩目文がつく。長頸瓶図21の1の土壙12号出土は推定高さ21cm、胴部を欠く。胎土は灰白色、黒班と小石粒を含み、焼成仕上り良好であり、緑色の自然釉が大半にかかり、内面底部にも釉がみられる。壺の破片は多くみられているが、その大半は地方産の胎土・仕上りの不良のものである。

杯の主なものに土壙21出土の図23の14がある。美濃須衛窯産の仕上り。焼成良好、口径15.3cm・高さ6.3cm、高台が付く。注目されるのは、内面に幕状に付着する漆である。この漆については後日研究所に調査をお願いいたしたい。火漆の顯著に付くものに土壙14号出土(図23の13)、土壙15号出土(図22の6)があり、胎土・焼成の良いものである。杯の出土は多く、糸切り底と高台付きとがあり、多くは地方産である。

蓋杯には上層出土(24の2・3)2の身は、口径6.8cmと小形であり、土釜形を残し、胎土・成形・焼成良好。古墳時代の混入品である。3の蓋のつまみは胎土・仕上り良好であり、やや古い時期とみる。これらその他、蓋数点の出土をみるが、地方産のものである。

土師器は大半が小片で図示したものは僅かである。国分式の壺片と杯があり、土壙15号出土(図22の12)杯は内面黒色である。上層出土の図24の15~17はロクロ成形、内面黒色であり、17には高台が付く。平安時代末期のものである。

灰釉陶器の出土は少なく、図示したのは土壙12号出土の皿(図21の14)と15号出土の壺底部(図22の10)のみで東濃産である。綠釉陶器杯(図24の14)を上層より出土をみていく。胎土は白く、素地は軟質で光沢をもつた緑色を呈す。幾内産10世紀である。

石器では土壙6号出土(図22の17)の砂岩製の磁石がある。

IV 考 察

1. 堂垣外出土弥生式土器

下伊那地方への弥生文化の流入はBC200年頃とされる。長く続いた狩猟・漁撈・採集を主とした绳文時代も、気象の変化やその対象となる物質の減少より行きづまりをきたしてきた。その中で北九州・中国地方では大陸文化を積極的に受容して打開を計り、稻作を中心とした農耕技術と鉄器を中心とする道具を自分のものとしてきた。これが弥生文化であり、一気に波及して濃尾平野まで拡がった。この時期が弥生前期⁽¹⁾であり、その余波が伊那谷へ入りこんできたのが豊丘村南小学校用地から出土した林里式土器である。これが伊那谷への弥生文化波及の第1波で前期の東海地方の西志賀式土器があり、条痕土器が主体となっている。

濃尾平野に定着した弥生文化は東日本へと第2波の東漸を始めた。この最初の土器が寺所式土器である。飯田市松尾寺所遺跡を標準としたもので、濃尾平野の条痕土器を主体とし、東海地方そのものの土器であり、東海地方からの波及を示すものである。これら弥生文化東漸のルートをみると、矢作川・豊川・天竜川をさかのぼり、南部山地をさ迷いつば飯田盆地の沖積地帯に達したと考えられる。

伊那谷に弥生文化の根をおろしたのが阿島式土器である。绳文と沈線文の長頸壺は汎東日本的な特徴を示し、鉢は条痕文・沈線文と口唇に刻目文を施す地方的な土器である。阿島式土器は喬木村阿島五反田阿島遺跡を標準とするものである。堂垣外今次発掘された2号住居址・流失遺構北出土の鉢形土器は櫛状具による沈線文・条痕文が施され、口唇に刻目文・押圧文をめぐらしている。壺形土器は発見されていないが、阿島式に比定されるものであり、壺形土器の出現からみて阿島式の新しい時期とみられ、次期北原式への移行を示すものと考えたい。

ついで高森町下市田北原遺跡を標準とする北原式土器が出現する。幾内で創製された櫛描文を主文様とし、壺・壺・台付壺がある。壺は口頸部は太く短かく、口縁部は僅かに外反し、胴部は大きく張り、小さな底部へとちぢまる。文様は櫛描文と箇描文が共存する。間をおいた横走文の上下に刺突文・箇描き・條線文をつけ、肩部に箇描き三角文をめぐらすが大半を占める。壺は口頸部が短かく、頸部はしまって口縁は外反し、胴上半部で口径とはほぼ同じ位の径に張り、底部へと緩くちぢまっていく。文様は口唇に绳文・刻目文をつけ、頸部に櫛描横走文（波状文・簾状文）がつき、そこから胴下半部にかけ櫛描文がつき、特に羽状文が多い。壺・壺ともに一見北原式とわかるものである。台付壺には小形が多く、大形もみられる。口縁部は受口状をなし、頸部はしまって胴部は中央で張り、小さな台が付く。文様は口唇・口縁帯部に绳文か波状文を、胴部に波状文・円の字重ねを施し、ボタン状の貼布がつくもみられる。これら器形外に小型土器・鉢・広口壺が僅かにみられる。

北原式に次いで弥生中期終末期の恒川式がある。座光寺恒川遺跡を標準とするもので、北原式より、より櫛描文が盛行するものであり、壺の口縁が受口状をなすが特徴である。しかし、北原式との間に大きな差違はみとめられず、大きくとらえれば北原土器に入るものである。

堂垣外出土土器をみると、1号住居址の壺は北原式である。壺は、図13の2は北原式とみるが他の大半は恒川式である。図13の1は、土曾川対岸の座光寺正泉寺出土の恒川式を代表する壺と同系であり、図13

の14の台が付く台付壺とみるものである。北原式と恒川式土器についての明解は現在整理中の国道153号座光寺バイパス発掘調査結果を待つものである。

北原式・恒川式に続く座光寺原式は座光寺原遺跡を標準遺跡とする。(座光寺原遺跡は大堤団地)座光寺原式になると器形・文様に大きな差を生じ、弥生後期となる。後期の時期には沖積段丘面から洪積段丘・扇状地へと遺跡は急増を示し、伊那谷を拠点とした独自の文化圏が形成され、東海地方の土器も搬入されてくる。後期後半から終末期にかけて発展した中島式土器(座光寺中島遺跡を標準とする)は、南は佐久間、西は上矢作町、北は辰野までその文化圏が及んでいる。その終末期には幾内を中心に形成された土師器が入ってくる。やがて大和を中心とした古代統一国家の中に餘々に組入れられていったとみられ、古墳時代へと移行した。

堂垣外では中島式土器は1号住居址上層より図13の12の壺片の出土をみたにすぎない。おそらく、発掘地点の一段高位の自然堤防上の水田に弥生中期から後期にかけての集落が展開されたものと推測される。

2. 堂 垣 外 出 土 石 器

石器の出土をみると、住居址では2号址より石鋸1と打製石庖丁とみる阿島遺跡出土例にみる横刃形石器2この出土をみたにすぎず、溝址より石鋸2・打石斧1・敲打器1・打製石庖丁1と石庖丁とみる横刃形石器1の出土をみ、他は土壙出土である。石鋸出土は計6こであり、北原遺跡に多量の出土をみた磨石鋸。その未製品は、土壤19号より未製品1この出土をみたにすぎない。遺跡の中心をはずれた南側の1部調査結果であり、石器の状態について、はっきりいうことはできない。

3. 奈 良・平 安 時 代 の 遺 物

奈良時代5号住居址出土遺物は須恵器を主体にし、土師器は真間式の小片を僅かにみたにすぎない。須恵器には壺・鉢・蓋杯・杯があり、胎土に小石粒を僅か含み、仕上り、焼成良好であり、美濃須衛窯産とみるものである。図18の7の蓋杯は高台付の身と蓋があり、身は短かい立上り口辺をなす。身の内部を除き朱彩されている。杯は底部は施削りされ、9は内面に漆が入れられたとみる痕跡を残している。

平安時代の住居址3軒が発掘され、須恵器を主体に僅かな土師器と灰釉陶器片の出土をみている。須恵器は地方産が多くなり、美濃産の須恵器は減少を示す。灰釉陶器は美濃系であり、土師器は国分式の壺・ロクロ成形の小形壺がみられる。いずれも11世紀後半に位づくものである。

土壙群出土の遺物は多く、大半が須恵器であり、土師器片・灰釉陶器片が僅かと縁釉陶器片1点がみられる。上層出土の図24の2の小形杯は土釜形式をなし、胎土、焼成良好な古墳時代とみるものである。土壤12号出土(図21)1の長頸瓶は胎土、焼成良好な自然釉の多くかかるもので形式からみると陶器山21様式に類似が求められ、奈良時代にさかのぼるとみるが、他の須恵器は平安時代後半のものである。

土壤21号出土の図23の10の壺は口縁部に波状文が施され、胎土・焼成良好なものであり、11の高台付杯は内面に漆が幕状に付着している。壺・杯とも平安時代前半の器形であり、美濃須衛窯産とみる。図22の6・図23の13の杯は火事が頗著につくもので注目される。

出土杯の多くは糸切底であり、地方産が多く平安時代後半のものである。上層出土の図26の6・7の高杯脚部は仕上り、胎土良好な平安時代前半とみる。

土師器の出土は少なく、国分式壺片と内面黒色の杯、ロクロ成形内面黒色の杯があり、灰釉陶器は美濃産で、ともに10世紀後半から11世紀後半にかけてのものである。

緑釉陶器（図24の14）の杯は光沢あるうす緑色を呈し、胎土は白く、素地は軟質、幾内産の10世紀後半とみるものである。

4. 恒川遺跡郡との関連

堂垣外の北土曾川を隔てた1kmにある恒川遺跡⁽¹⁸⁾は、国道153号座光寺バイパスに伴う発掘調査によって郡衙址と推定される大造構群が発見され、木簡・和銅開珎・金銅製帶金具をはじめ多くの貴重な遺物の出土をみている。時代的にみると弥生中期後半から後期、古墳時代初頭、奈良・平安時代の造構・遺物が発見され、各方面から注視されている。同位段丘面の南に位置する堂垣外遺跡は、南端の1部調査に終っているが奈良・平安時代の資料は注目すべきものがあり、恒川遺跡の外郭として、その関連性が予想されるものであり、今後に残された課題といえよう。

注1 神 村 透 「豊丘村林里遺跡」 長野県考古学会誌4号 1967・3

2 神 村 透 「飯田市座光寺遺跡とその他の遺跡」 長野県考古学会誌4号 1967・3

2 佐 藤 「寺所遺跡と寺所式土器」 中部高地の考古学Ⅱ 1982

3 佐藤・宮沢恒之 「喬木村阿島遺跡」 長野県考古学会誌4号 1967・3

4 神 村 透 他 「北原遺跡」 高森町教育委員会 1972・3

5 宮 沢 恒 之 「飯田市恒川遺跡」 長野県考古学会誌4号 1967・3

6 今 村 善 輝 「飯田市座光寺原遺跡」 長野県考古学会誌4号 1967・3

7 宮 沢 恒 之 「飯田市中島遺跡」 長野県考古学会誌4号 1967・3

8 長野県考古学会 「地方官衙のあり方」 長野県考古学会誌44号 1982・11

ま　と　め

堂垣外遺跡は土曾川南岸の自然堤防上に立地し、昭和57年度県教育委員会による上郷町遺跡分布調査によって岡田正彦氏によって発見された新遺跡である。

本次調査は、昭和57年度土地改良事業による堂垣外・西岡地区の農道新設工事に伴う発掘調査であり、長さ239m、幅員4.5mの農道工事範囲であるが、現存する道路拡張が3分の2を占め、その側は用水路が通っており、調査可能な80m×4.5mの限られた範囲にとどまった。遺跡の中心をはずれた1段低位となる南端部の1部調査であった。

I調査区は、土曾川の氾濫堆積の影響を受け、流失遺構もみられ、弥生中期住居址覆土の大半は砂礫で覆われ、平安時代土壤群上層は白砂で覆わっていた。このため調査地点ごと土層の異なりもみられた。

発掘された遺構、住居址は弥生中期2 奈良時代1 平安時代3軒、溝址1、土塙23がある。

弥生中期土器では、阿島式の2号住居址・流失遺構北出土の深鉢・壺があり、壺形土器はこの期では初見であり、北原式への移行期を示す資料とも思われるが今後の課題である。

北原式土器については、1号住居址出土壺形土器は一見北原式と判るが、壺形土器は土曾川対岸の正泉寺遺跡の恒川式を代表する壺と同類である。溝址出土の大形壺の文様の波状文の盛行は恒川式の範囲にはいるものもあり、恒川式土器は「大きくとらえれば北原式土器の中に入るものである。」⁽¹⁾といわれた神村透氏の見解が肯定される、北原式・恒川式については今後に残る課題といえよう。

奈良・平安時代の遺物は多く、注目すべきものがある。恒川遺跡群の南の同位段丘面上にある遺跡として、それとの関連性が考えられ、今後追求るべき課題である。

注1 神村透 「弥生時代の問題点……北原式土器」 北原遺跡 1972・3

おわりに、今次調査にあたって上郷町教育委員会の積極的な取り組みがあり、調査員岡田正彦先生の御援助、作業にあたられた方々の熱心な作業態度が大きな力となったこと、隣接する岡田実先生宅の何かと御便宣を与えられたこと等に深謝したい。

(佐藤 雄信)

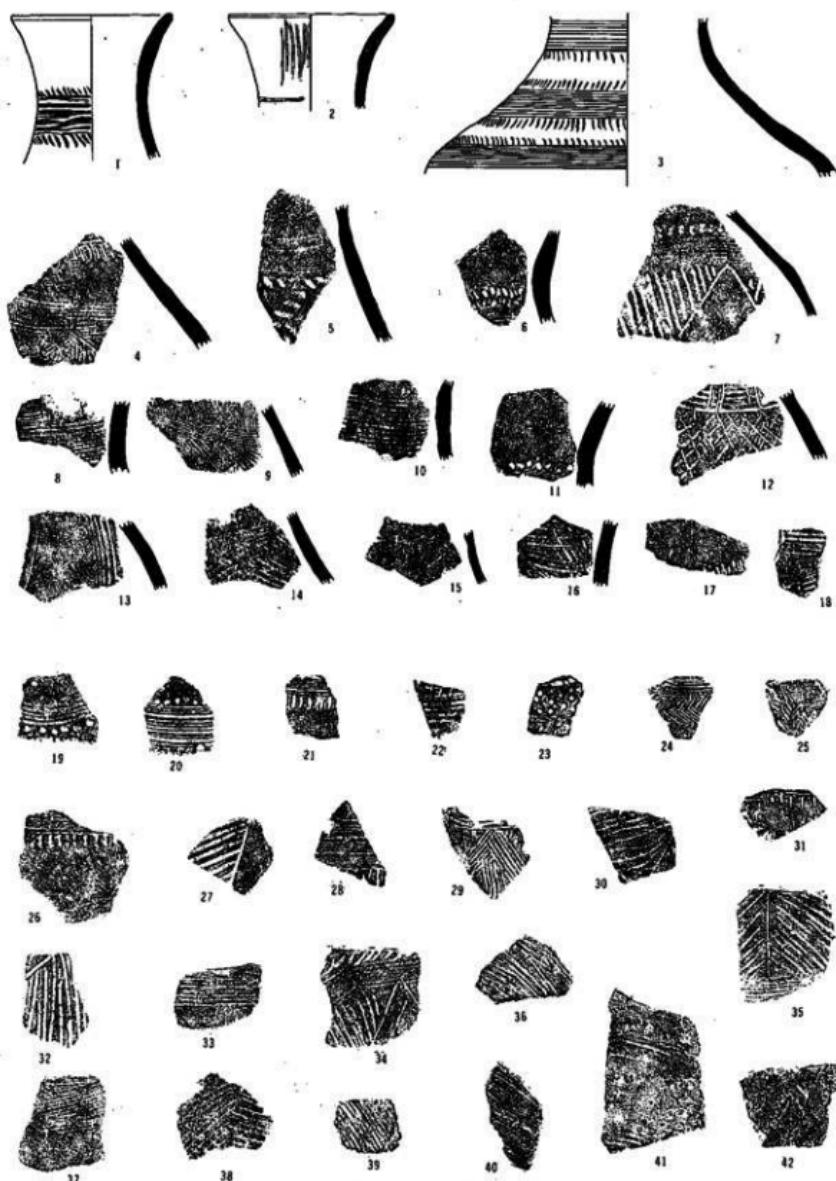


图12 堂坛外1号住居址出土遗物 I (1 : 3)

0 10 cm

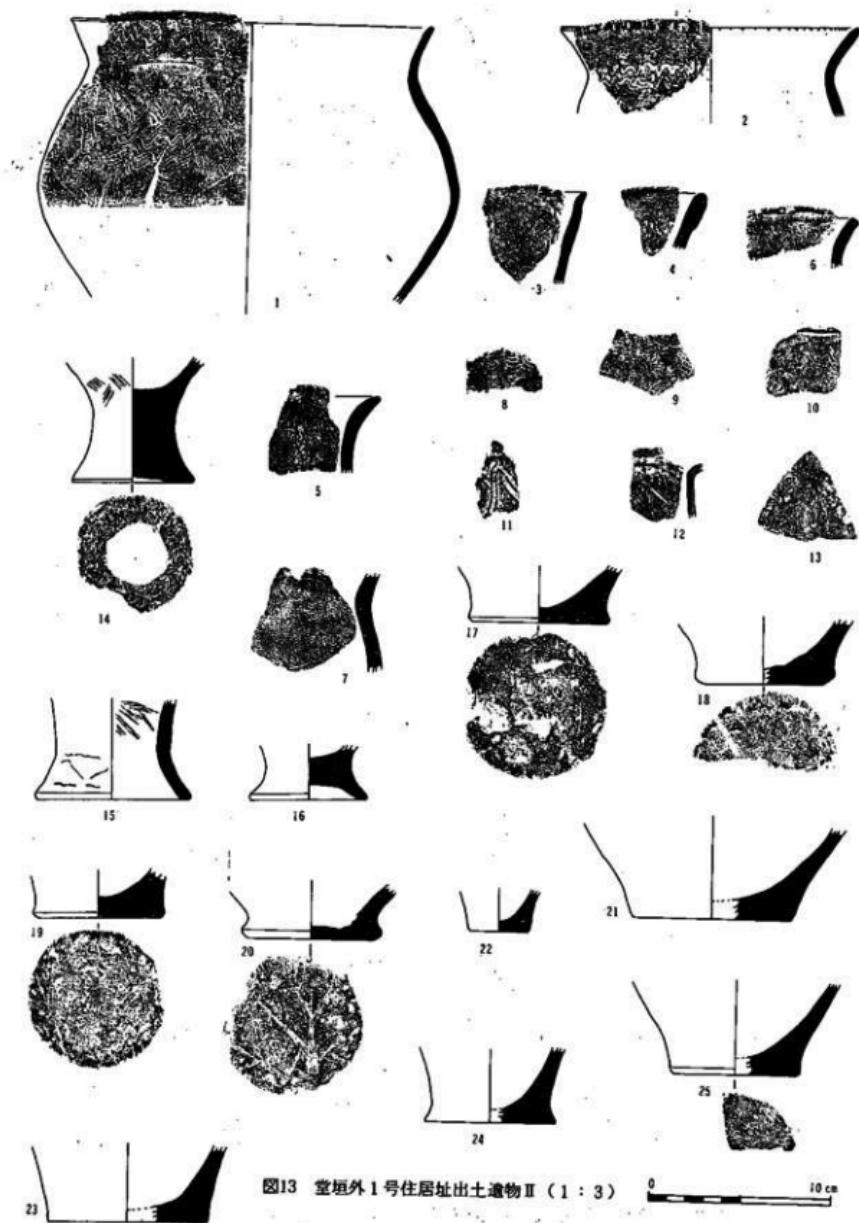


图13 堂垣外1号住居址出土遗物Ⅱ (1 : 3)

0 10 cm

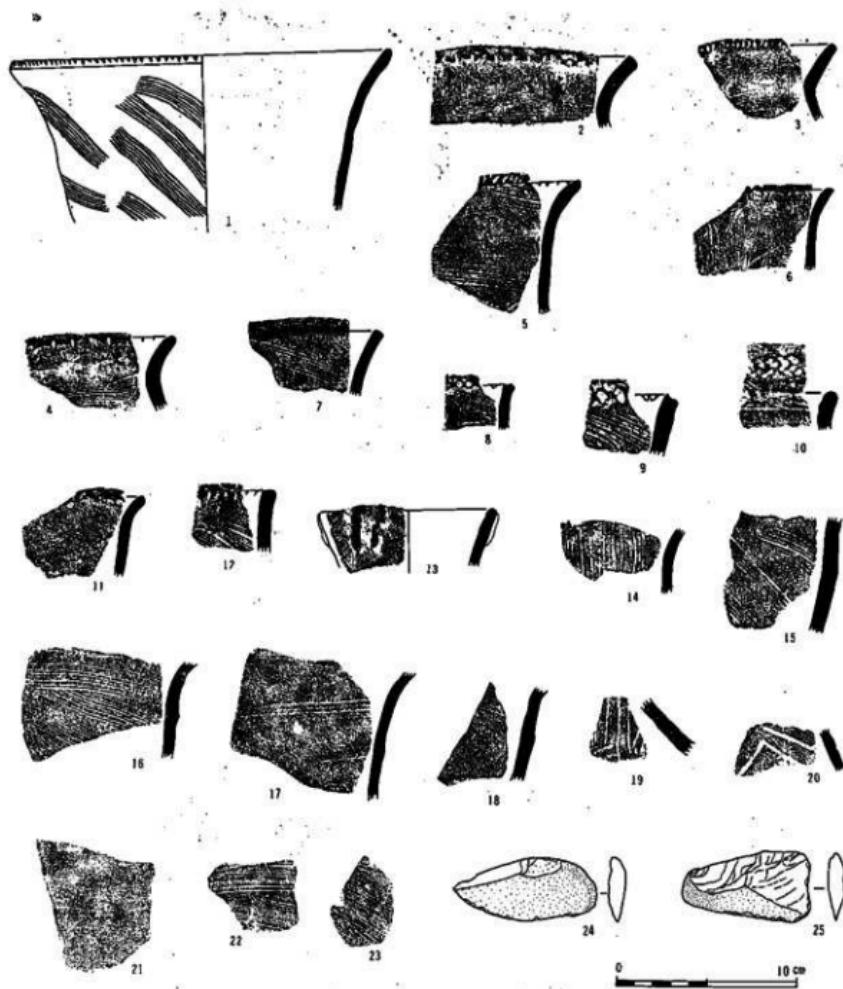


图14 堂垣外2号居住址出土遗物 (1:3)

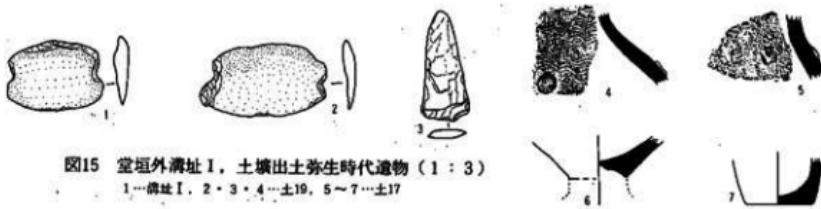


图15 堂垣外溝址 I, 土壤出土萌芽時代遺物 (1:3)
1—溝址 I, 2·3—土19, 4—土18, 5~7—土17

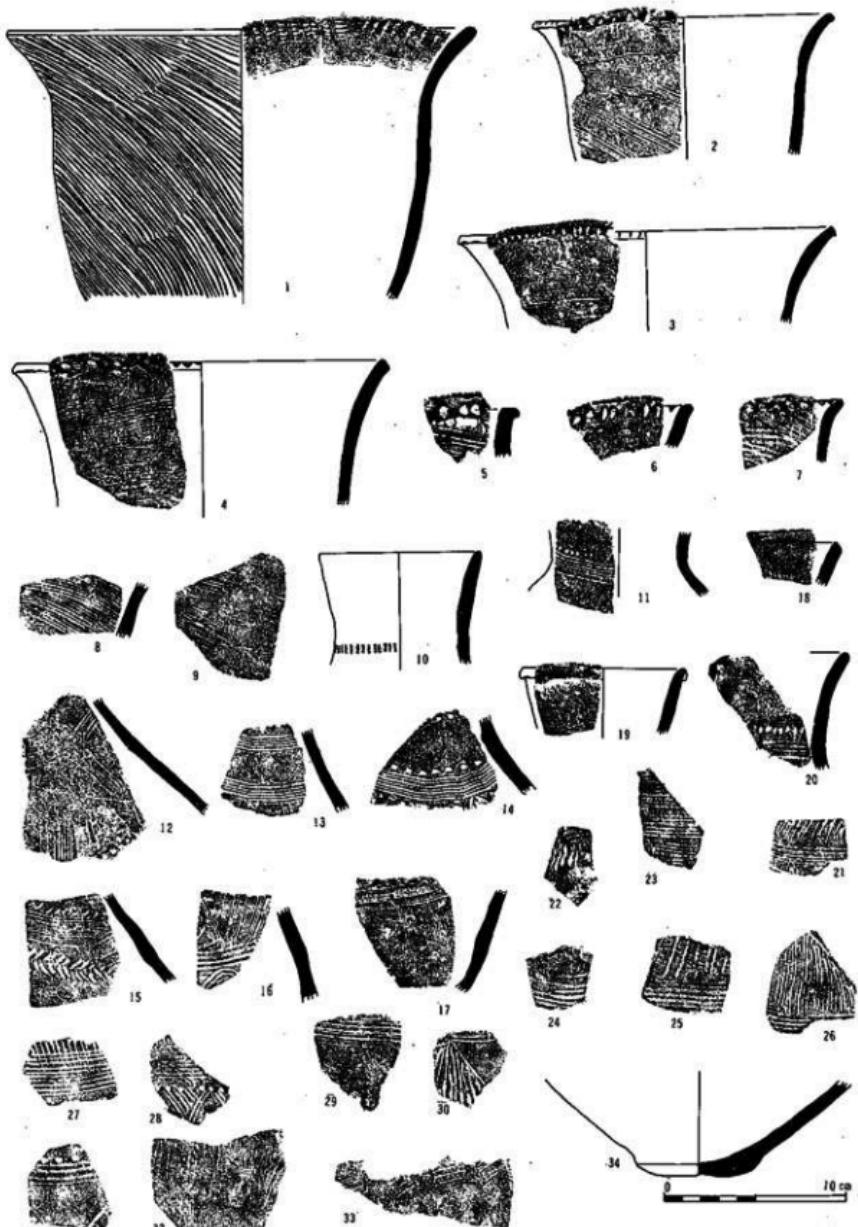


圖16 堂壠外西端流失遺構出土遺物 (1 : 3)
1~9---北, 10~35---南

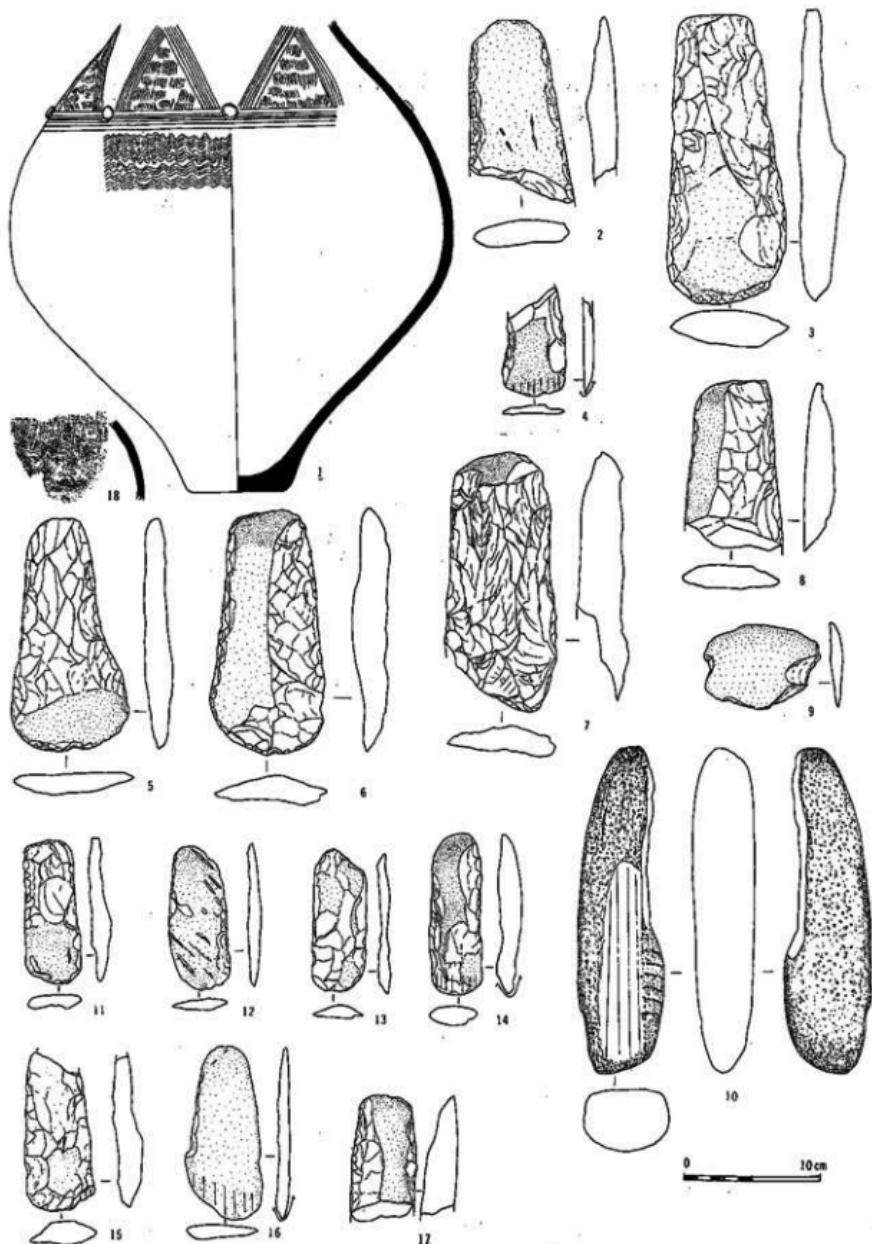


图17 堂桓外溝址 1号，2号住居址，土壤群等出土遗物 (1:4)

1~4·9·10·18···溝址 I, 7···2住, 5···土壤群上層, 6···土19
8···土4, 11···3住上層, 12···5住上層, 13···土3, 14···土8
15·16···西端底失遺物, 17···土5

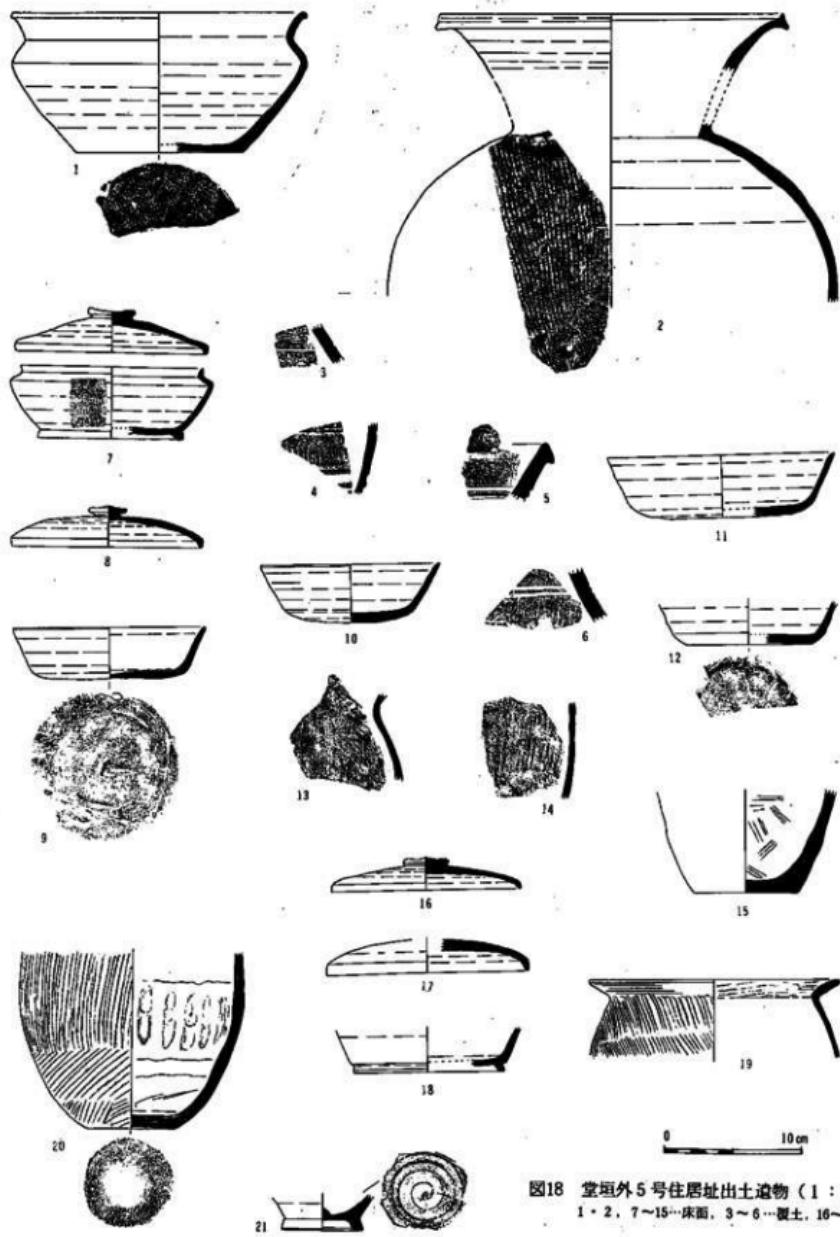


图18 堂垣外5号住居址出土遗物 (1:4)
1~2, 7~15…床面, 3~6…壁土, 16~21…上层

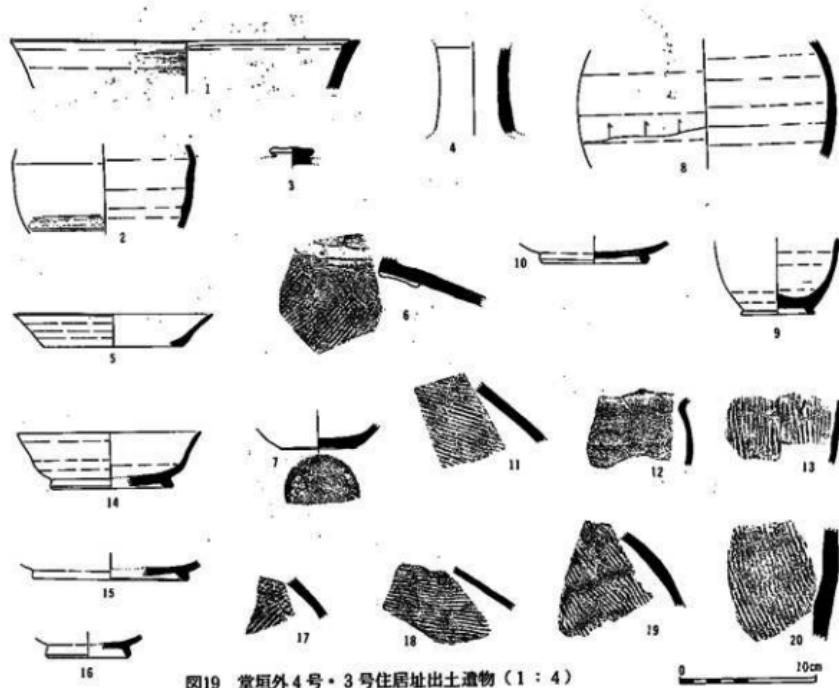


图19 堂垣外4号·3号住居址出土遗物 (1 : 4)
1~13···4住, 14~20···3住

0 10cm

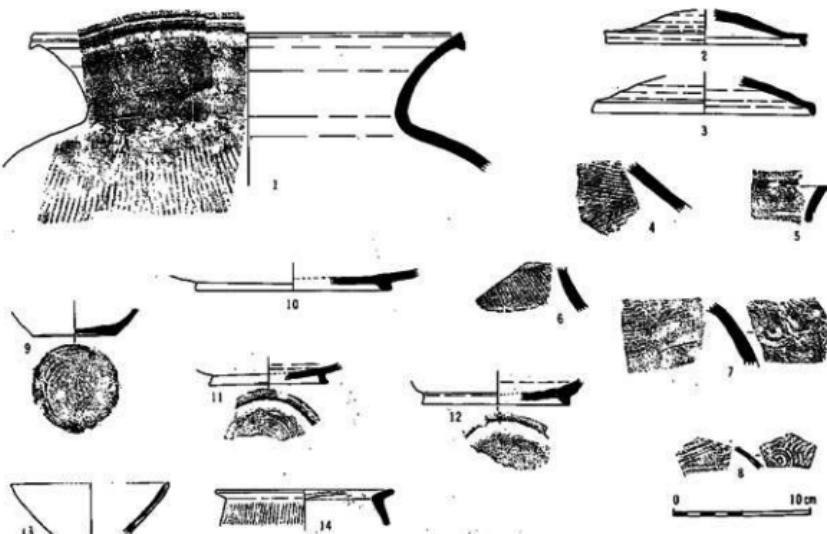


图20 堂垣外6号住居址出土遗物 (1 : 4)

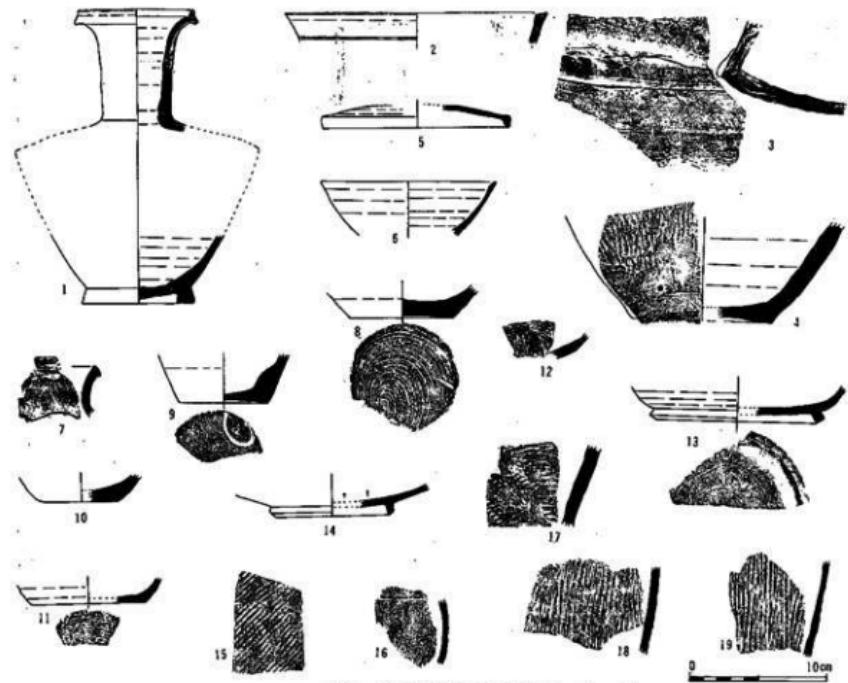


图21 堂垣外土壤12号出土遗物 (1 : 4)

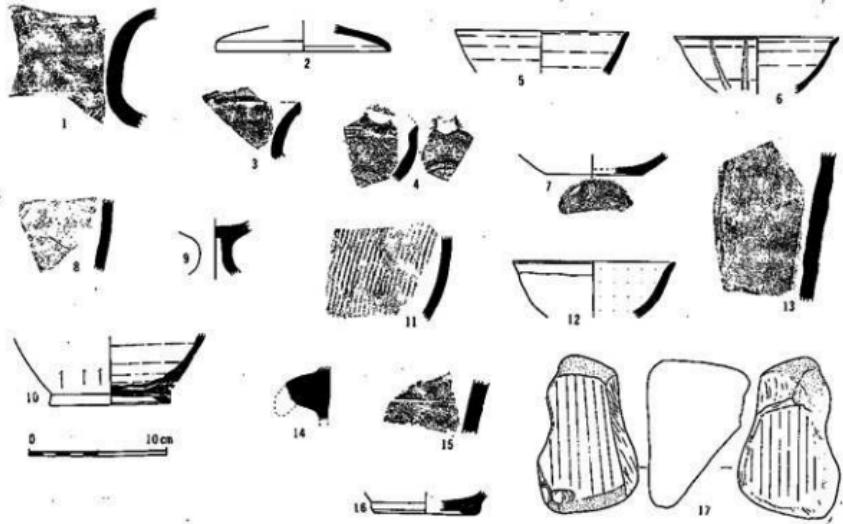


图22 堂垣外土壤15号, 6·7号出土遗物 (1 : 4)
1~13···土15 14~17···土6·7

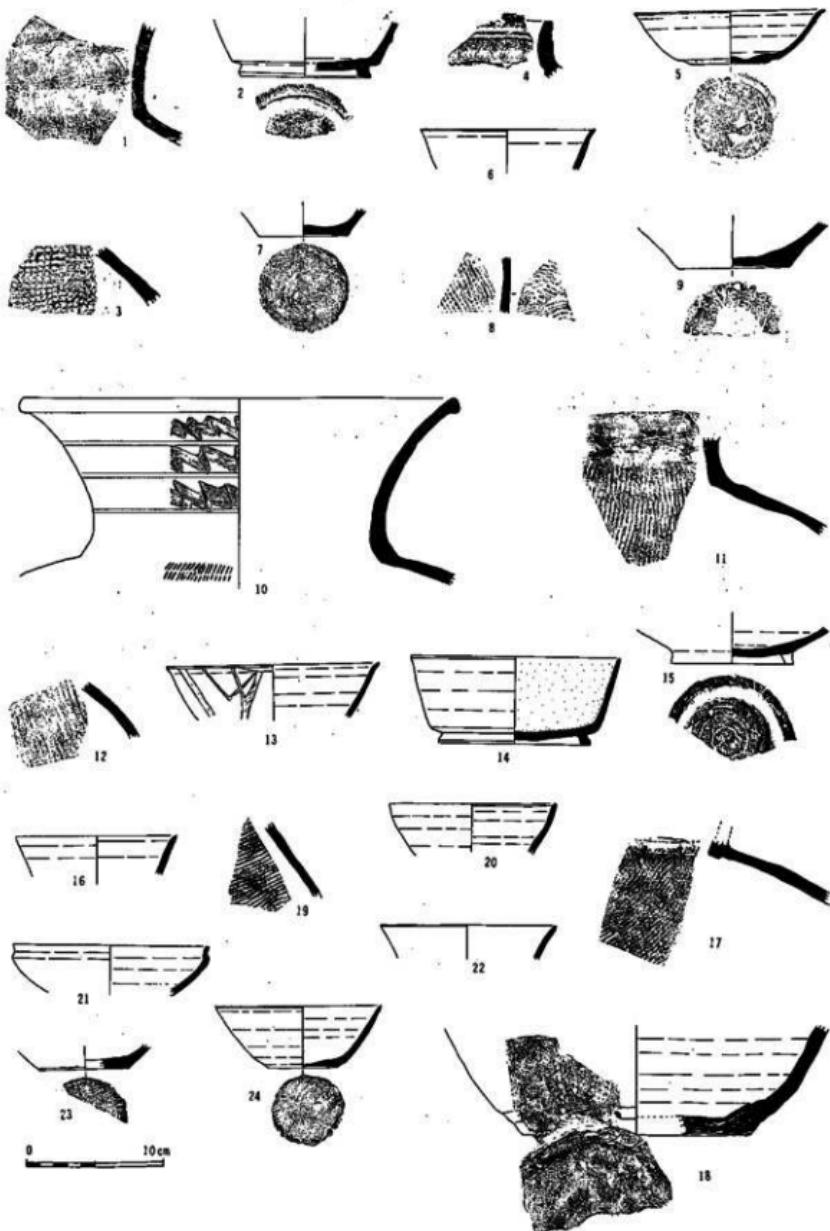


图23 堂埋外土壤 8号·9号·14号·21号·20号·23号出土遗物 (1:4)

1~3—土8, 4~9—土9, 11~13—土14, 10·14·15—土21, 16—土20

17~24—土23

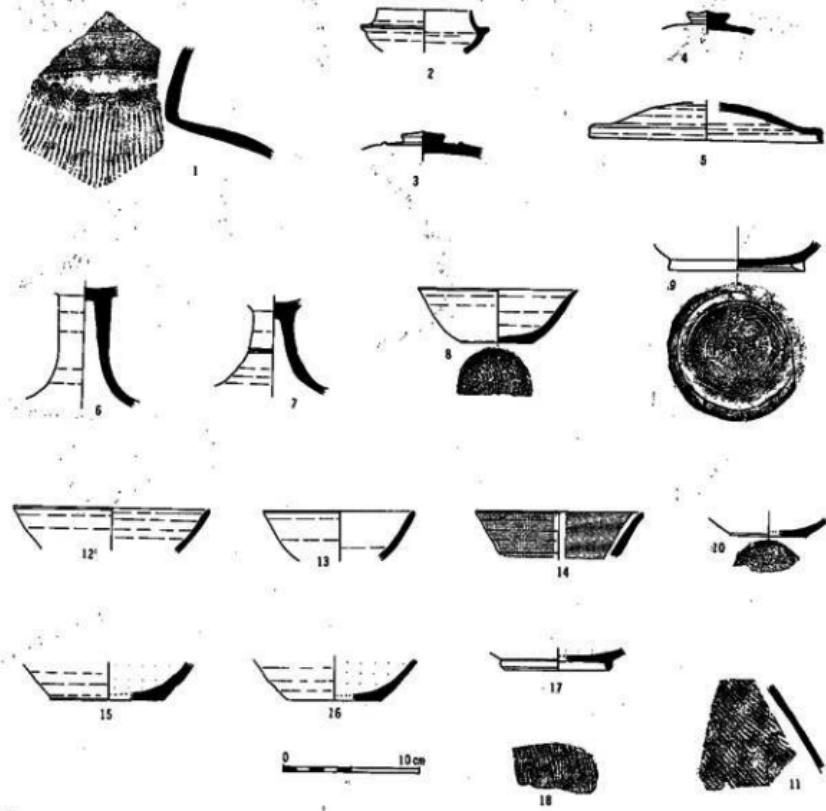
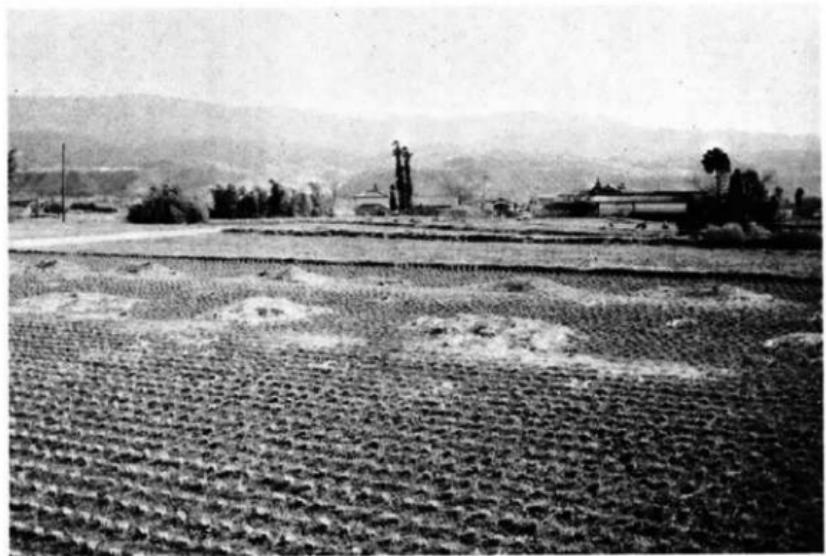


图24 堂垣外土壤群上层出土遗物 (1 : 4)

1~13…灰陶器，14…绿釉陶器，15~18…土胚器

図版 I 遺 跡



遺跡全景一西より



遺跡全景一東より

図版 II 遺構



I 調査区北側土層断面



I 調査区遺構全景—西より



I 号住居址



I 号住居址 磚の出土



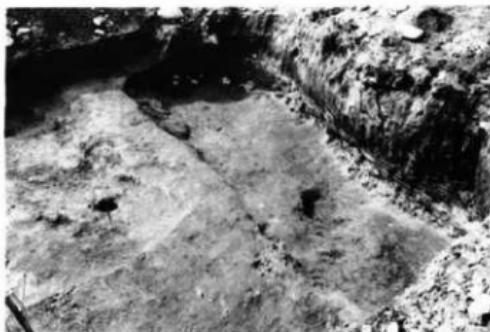
2 号住居址



1号（手前）・2号（上）住居址と流失遺構



1号・2号住居址境よりの土器出土



流失遺構



流失遺構西の土層断面



流失遺構と2号住居址北土層断面



溝址 1—東より



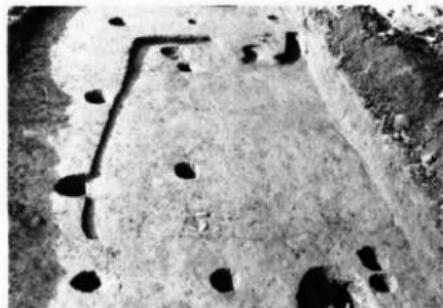
溝址 1—西より



溝址内 土器の出土



土壌3号(上), 4号(中), 5号(下)



5号住居址



5号住居址 須恵器出土



5号住居址 須恵器出土



3号住居址



I調査区遺構群上層。右下は6号住居址
中央下の白い部分は土壤群上層



6号住居址 須恵器甕出土



土壤群一西より



土壤21号 漆の入る杯の出土



土壤群一東より



土壤 2号 長頸瓶出土



土壤21号 須恵器隻片出土

図版III 遺 物

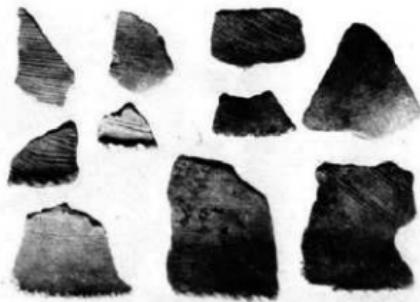
(I) 弥生中期



2号住居址出土壺（阿島式）



2号住居址出土壺 内面



2号住居址・流失遺構出土（阿島式）



2号住居址・流失遺構出土（阿島式）



2号住居址・流失遺構出土（阿島式）



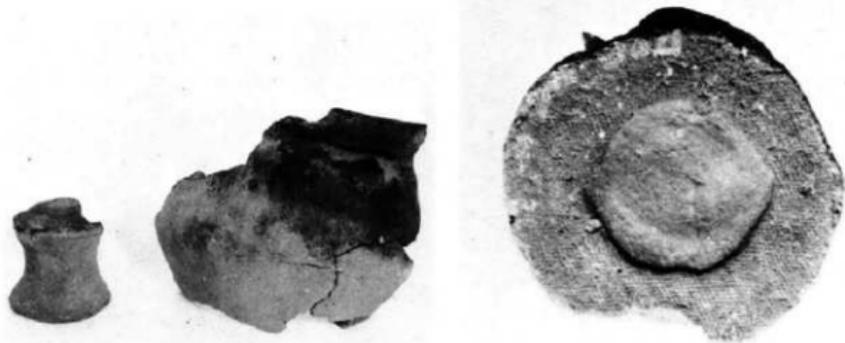
I号住居址出土壺（北原式）



I号住居址出土壺（北原式）



I号住居址出土壺（恒川式）

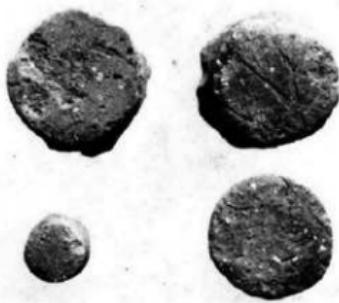


I号住居址出土 台付壺ともみる一壺と台部

I号住居址出土 台部底（布痕が付く）



I号住居址出発



土器底部



石器（石歛と打製石庵丁）



石器（右敲打器、左石歛）



溝址出土大形壺

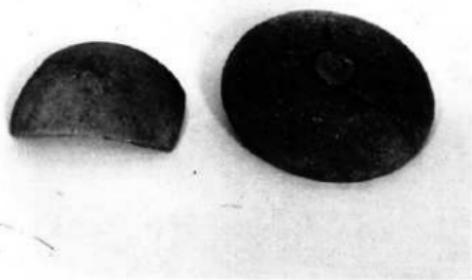
(II) 奈良時代



5号住居址出土蓋杯



5号住居址出土鉢（左）と杯（右）



5号住居址出土蓋（右）と杯底部（左）

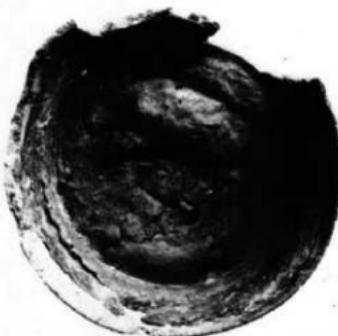
(III) 平安時代



土塙12号出土長頸瓶



土塙21号出土杯—内部に漆が入る



土塙21号出土杯—内部の漆の状態



土塙14号出土甕—波状文が美しい



6号住居址出甕

図版IV 発掘調査スナップ



調査にかかる



グリッド調査



遺構の検出



東端部のトレンチ調査

発掘調査組織

1. 調査委員会

・顧問	山田 隆士	町長
	篠田 茂三	助役
	安田 達雄	収入役
	岡田 三郎	議會議長
	井坪 博司	議会建設委員長
	岡山 安治	地元議員(北条)
	岡田 康篤	地元議員(丹保)
	安協 吉雄	飯沼区長
	岡田 仙吉	丹保耕地代表
	小平 幸雄	北条耕地代表
・委員	下井 稲道	教育委員会委員長(委員長)
	岡田 道人	" 委員
	下平 論訓	" "
	北原 忠夫	" "
	岡島 昌平	" 教育長
	小木曾 寿英	文化財保護委員
	牧野 光弥	"
	麦島 正吉	"
	稻垣 隆	"
・事務局	今村 賢一	教育委員会事務局長
	菊本 正義	建設課長
	宮下 式成	建設課技師
	篠田 公平	教育委員会事務局社会教育係長
	渋谷 哲郎	" 体育係長
	大藏 豊	" 主事
	林 恵津子	" "

2. 調査団

団長	佐藤 達信
調査員	岡田 正彦
	片山 徹
	牧内 住子

3. 作業参加者

岡島 安雄	小平 不二子	兼子 幡子	須山 エリ子	桜井 みき子
田平 きみ子	三浦 なおえ	吉川 紀美子	吉川 ユリ子	岡田 喜衛門
吉川 康夫	岡田 実	北原 弥恵子	岡田 章治	岡田 紀子
岡田 明子	北原 重子	宮沢 智子	山口 やす子	
福島 明夫	北村 重実	柳沢 八重子	関島 久美	
下平 幸江				吉川 文三

・遺物整理・製図

佐藤 いなゑ 田口 さなゑ

堂 壇 外 遺 跡

— 弥生中期、奈良・平安時代を中心とした —

埋蔵文化財発掘調査報告書

1983. 9

長野県下伊那郡上郷町

印刷 株式会社 秀文社

